



原典研究

イブン・ハルドゥーン自伝3

訳・註：橋爪 烈

原山 隆広
吉村 武典
註：佐藤健太郎

凡 例

1 本稿は、『イスラーム地域研究ジャーナル』に連載中の以下の訳稿の続編である。

柳谷あゆみ訳註、佐藤健太郎註『イスラーム地域研究ジャーナル』一、二〇〇九年、四五―五八頁（以下、「イブン・ハルドゥーン自伝1」と略記）

阿久津正幸・中町信孝訳註、佐藤健太郎註『イスラーム地域研究ジャーナル』二、二〇一〇年、三五―五六頁（以下、「イブン・ハルドゥーン自伝2」と略記）

2 翻訳の底本は、以下のイブン・タウウィートによる校訂版を用いた。

Ibn Khaldūn, *al-Ta'rif bi-Ibn Khaldūn wa rihlat-hu sharqan wa gharban*, ed. Muhammad ibn Tawfī al-Tanjī, Cairo: Maṭba'at Lajnat al-Taḥf wa al-Tarjama wa al-Nashr, 1951（以下「*al-Ta'rif*」と略記）

また、翻訳にあたっては以下のフランス語訳を適宜参照した。

Ibn Khaldūn, *Le Livre des exemples. T.1 Autobiographie, Muqaddima*, tr. Abdesselam Cheddadi, Paris: Gallimard, 2002（以下「*Autobiographie*」と略記）

3

イブン・ハルドゥーンの『歴史序説』および彼の史書『省察すべき実例の書』は、彼の自伝を読み解くうえで参考になるところが多い。主に使用したのは、以下の校訂版および日本語訳である。

Ibn Khaldūn, *Tārīkh Ibn Khaldūn al-musammā bi-Kitāb al-'Ibar*, 7 vols., Beirut, 1971（ブーラーク版のプリント。以下「*al-'Ibar*」と略記）

Prolegomènes d'Ebn Khaldoun: texte arabe publié d'après les manuscrits de la Bibliothèque impériale, ed. M. Quatremère, Paris, 1858（以下「*Prolegomènes*」と略記）

イブン・ハルドゥーン著、森本公誠訳『歴史序説』全四巻、東京：岩波書店（岩波文庫）、二〇〇一年（以下、『歴史序説』と略記）

4

訳文と原文の対照がしやすいよう、訳文中に「p.002」などとして校訂版のページの切れ目を示した。

5

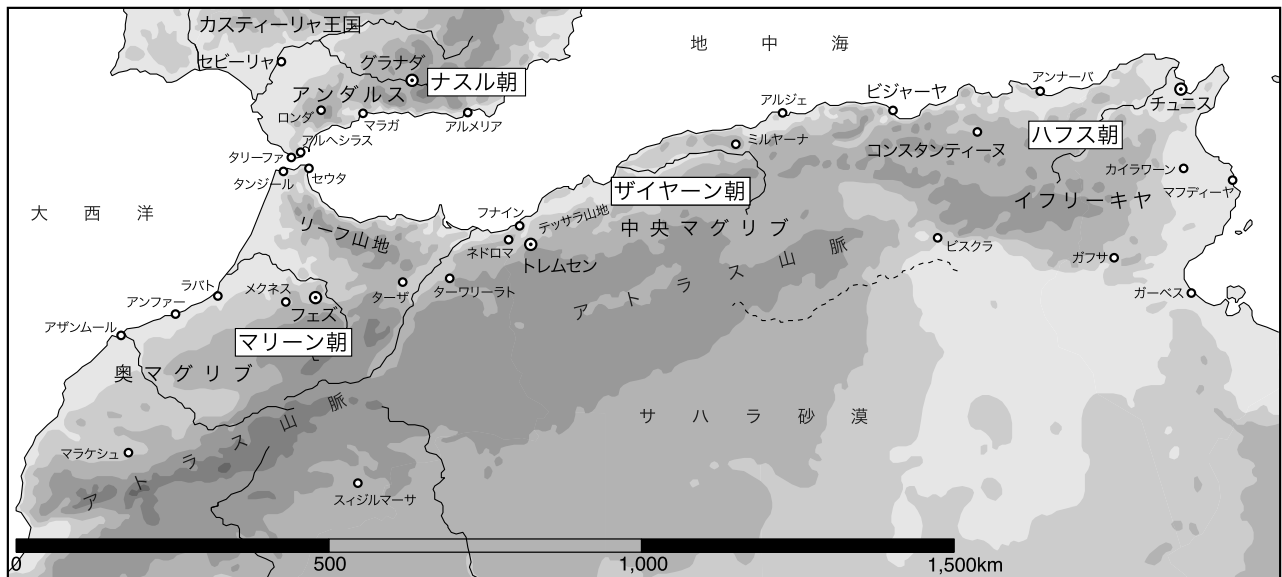
年代は、訳文ではアラビア語原文のヒジュラ暦表記を西暦に換算した上で、ヒジュラ暦／西暦の形式で記した。一方、註では必要な場合を除いて西暦のみ記した。ヒジュラ暦を西暦に換算する際、年代を決定しがたい場合には「六八五／一二八六七」とした。

6

訳文中の括弧のうち、「」は訳者による語句の補足、（ ）は簡単な語彙の説明や言い換えである。また、『』は書名を示す。【 】は訳註者が付け加えた小見出しである。詩や長文にわたる引用は、一段下げて記した。

7

アラビア語のカナ表記は大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店、二〇〇二年の方式に拠った。



マグリブとイフリーキヤ

イブン・ハルドゥーンの生い立ちと教えを受けた先生について(承前)

【ラハウイーの頌詩の註解…サッティー】

さて、サッティー^①について言うと、彼の名はムハンマド・イブン・スライマーン^②であり、フェズの近隣に住むアウラバ族の支族であるサッター族^③の出である。彼の父スライマーンはフェズの町に住み、故にムハンマド「サッティー」もフェズで成長した。そして、マグリブにおけるマリーク派の第一人者であり、その名も高き人物であり、フェズの大カーディーであったアブー・ハサン・スガイル師^④に師事し、彼の許で法学を学んだ。また、サッティーはマリークの学説を誰よりもよく記憶し、理解している人物であった。

ところで、マリーン朝スルターン・アブー・ハサン^⑤はその信仰と度量の大きさ、加えてその勢威の涯なき高さ故に、常々自分のマジユリスをウラマーによってさらに高めることを期待していた。そこでスルターンは、彼と同行し、同席する者をウラマーたちの中から選んだ。その中に、件の「p.021」ムハンマド・イブン・スライマーン「サッティー」師がいたのである。

さて、サッティーはチュニス^⑥の我々の許に、その一団に混じってやって来た。そして我々は彼の多くの美德を目の当たりにした。そしてそれらの美德のうち、法学に関しては、記憶の面でも理解の面でも、誰も彼にかなわなかった。私と我が兄ムハンマド——神が彼を慈しみますように——が彼と知り合うことになり、兄は彼の許でアブー・ハサン・ラフミー^⑦の『教示の書』を学んだのであるが、彼は、数多くの講義において、自分のメモ書きと記憶に基づいて、その書を我が兄に対して訂正するというを行ったのである。サッティーは同様の事を、自分が苦勞して運んだ書物の大部分について行っていた。また彼は「マリーン朝」スルターン・アブー・ハサンと共にカイラワーンの戦い^⑧に赴き、スルターンと共にチュニスに逃れた。そしてチュニスに約二年滞在した。

その後、マグリブにてスルターンに対する反乱が起き、スルターンの息子アブー・イナーン^⑨が自立した。そのためアブー・ハサンは艦隊を率いて「七」五〇年の末／一三四九年末にチュニスから出航した。そして、スルターンはビジャーヤを通過したが、その沿岸において船が難破するという事

【ラハウイーの頌詩の註解…アービリー】

さて、ムハンマドはトレムセンにおいて、カーデーである彼の祖父の庇護のもとに成長し、それ故、彼は父や叔父が重きをおいていた軍事を避けて知識を重んじるようになった。そして思春期になると、まず数学を好むようになった。そして、彼は数学に習熟して有名になった。そして人々は数学を学ぶために、成年に達したばかりの彼のところに群がった。

ところでイブラーヒム・アービリーは軍の一団を率いてトレムセンの外港であるフナイン¹⁶に駐留する部隊の長であった。ユースフ・イブシ・ヤアクーブがフナインを支配した時、彼はそこにいたイブシ・ザイヤシンの一党を捕え、また彼らと共にいたイブラーヒム・アービリーも捕えた。そして、トレムセンにおいて以下のような情報が広まった。すなわち、ユースフ・イブシ・ヤアクーブは彼ら（捕えられた者たち）の息子たちを人

[illegible]

めに、父と会うことを望んだ。また彼の家族もそうするようムハンマドを促した。そこで、ムハンマドは諸々の城壁を上り、「トレムセンを出て、」父の許へ行った。しかし、人質要求の情報は間違いであることを知った。

さて、ユースフ・イブン・ヤアクブはターワリーラト¹⁷におけるアンダルス人部隊¹⁸の隊長としてムハンマド・アービリーを用いようとしたが、ムハンマドはそ

れを嫌い、何もかも捨てて、粗衣⁽¹⁹⁾をまとい、

巡礼に出発した。そして
スーフィーたちの一団に

紛れて、ウツバードの修道場^{②〇}に至った。する

とそこでアービリーは、
マグリブで彼らの教宣を

確立しようとしてやって来ていたカルバラー²¹の民

の長にしてフサイン
家⁽²²⁾の長である人物に

出会った。その長は分別のある人物であつた。そ

の後その長はユースフ・イブン・ヤアクーブの軍

隊とその威勢の強さを見てその望みを捨て、諦めて故郷へ戻ることを決めたのであった。そこで、我々が師であるムハンマド・イブン・イブラーヒーム「アービリー」は彼の一同と共に出立した。

アービリー——神が彼を慈しみますように——は私にこう言った。「しばらくして、その長の状態とそれが彼に至ったところのものが明らかになり、私は彼の郎党や追隨者の一同に加わった」と。

アービリー曰く、「道中の町々において、彼の郎党や一党、そしてハーディムたちが彼を出迎え、その許にそれぞれの町から食料や金を持ってやって来た。とうとう我々はチュニスから海路アレクサンドリアへと向かった」と。

アービリー曰く、「海路にあつて、私は性的な欲求を強く感じ、件の長の存在故に、何度も洗滌²⁵することを恥じた。すると彼の側近の一人が樟脳²⁶を飲むよう、私に忠告した。そこで私は樟脳を一すくいし、それを飲んだ。すると私は昏乱してしまつた」と。

そして、彼はその状態でエジプトの地に至つたのである。ところで、その当時エジプトにはタキューッディーン²⁷・イブン・ダキーク・イー²⁸ド、イブン・リファ²⁹、サフイーユッディーン・ヒンディー³⁰、タブ³¹リーズイー³²、イブン・バディーウ³³などの理性の学問と伝承の学問の騎士たちがいた。しかしアービリーは、我々に対して彼らのことを言及する際には、彼らの名前を言うことぐらいいしかなかった。というのも、当時彼は昏乱していたからである。

その後、アービリーはその長と共にメッカ巡礼を行い、彼の一同と共にカルバラに向かった。その後、長はアービリーと共に、長の仲間を派遣し、マグリブのザワウワの地³⁴にある自分の隠れ家へアービリーを送り届けた。

そして我々が師（アービリー）——神が彼を慈しみますように——は私に言った。「私は、マグリブから蓄えとして多くのディーナール貨を持ってきたおり、それを着ていた長衣の中に隠し持っていた。その後、その長は私に件のこと（昏乱）が起こった時、私からそのディーナールを取り上げた。そして彼がマグリブまで私を送り届けるよう彼の部下を派遣したとき、それを彼らに渡し、ついに彼らが私を隠れ家へと連れて行った時、彼らはそのディーナールを私に返したのであった。ところで彼らは私のために、その長が命じた如く、そのディーナールについて長の許へと持ち帰る書付の中で第三者に証言させたのである」と。

そして、我々が師がマグリブへ到着した時、「マリーン朝スルターン」ユースフ・イブン・ヤアクーブが亡くなり、トレムセンの民は包囲から解放された。そして彼はトレムセンへと戻ったのだが、すでに彼は昏乱から正気を取り戻していた。そして彼は改めて知識を獲得することを強く望み、理性の諸学問へと傾倒した。そこで、彼はアブー・ムーサー³⁵・³⁶イブン・イマーム³⁷の許で論理学と二つの基礎に属する一群を学んだ。

この当時トレムセンの君主「ザイヤーン朝スルターン」アブー・ハンム³⁸の王権が隆盛を極めており、全てに力をふるっていた。そして、我々が師が計算術に卓越していることがアブー・ハンム³⁹の耳に届いた。そこで彼はアービリーに自分の財の管理と彼の財務官僚たちの監督をさせようとした。しかし、我々が師はそれを拒んだ。しかしアブー・ハンム⁴⁰はそれを彼に強いた。そこで彼は策を用いて彼の許から逃げ、「マリーン朝」スルターン・アブー・ラビーウ⁴¹治世下のフェズへ至った。そこでアブー・ハンム⁴²は彼に追手をかけた。そのため彼はフェズにおいてユダヤ教徒で、数学の師であつたハッルーフ・マギーリー⁴³の許に隠れた。そして彼の許で数学の知識を完全に習得し、熟達した。その後アービリーは身を隠してフェズを出てゆき、七一〇年代／一三一〇年代にマラケシュに至った。そして理性の学問と伝承の学問の権威であり、知識と実践の面で優れたスフイーであるアブー・アッバース・イブン・バンナー師⁴⁴の許に滞在し、彼に師事して知識を得た。そして理性の学問と数学と叡智の学問に精通した。

その後、スルターンに対して服従していなかったハスクーラ族の族長であるアリー・イブン・ムハンマド・イブン・トゥルーミート⁴⁵が、アービリーの許で学ぶために、彼を招聘した。そこで我々が師はイブン・トゥルーミートの許へと山へ登って行った。そこに滞在している間、族長は彼の許で学んだ。そして知識を求める人々が彼の許に集まり、教えたり学んだりすることが多くなった。それでアリー・イブン・ムハンマド「イブン・トゥルーミート」はその状況にあつて、アービリーを偉大とみなし、彼をますます気に入り、そして彼の忠告に従っていたのである。こうしてアービリーはその族長の寵愛を独占した。そしてイブン・トゥルーミートの指導力はその諸部族の間で大きくなった。そして、「マリーン朝」スルターンのアブー・サイードがアリー・イブン・トゥルーミートに山から降りてくるよう求めたとき、そのシャイフ（アービリー）は彼と共に山を下り、フェズに居を構えた。すると知識を求める人たちが各地から群れ集まつてきた。そのため彼の

知識が広まり、彼の名声が知られるようになった。

その後、「マリーン朝」スルターンのアブー・ハサンがトレムセンを征服し、アブー・ムーサー・イブン・イマームに会ったとき、アブー・ムーサーはスルターンに対してアービリーについて極めて高い評価を与え、彼が諸学において優れていると述べた。ところでそのスルターンは「p.33」^②、我々が述べたごとく、彼のマジユリスにウラマーを集めることに関心があった。そのためスルターンはフェズのアビリーの居所から彼を召し、マジユリスにおけるウラマーの列に加えた。そこでアービリーは教育に専念した。また、スルターンに同行し、タリーファの戦い^③やイフリーキヤにおけるカイラワーンの戦いに居合わせた。

また既にアービリーと我が父——神が彼を慈しみますように——の間には交友関係が存在したので、私は彼の許で学ぶことになった。そこで、私は彼の講義に参加し、彼から学んだ。そして私は数学から理性の諸学問を学び始めた。その後論理学と、そして次に二つの基礎と叡智の諸学問を学んだ。その間に、チュニスからマグリブへ向けてスルターン「アブー・ハサン」がその艦隊にて出発するという知らせが届いた。その時、その師（アービリー）は我々の家におり、我々が世話をしていた。そこで我々は彼に留まるよう忠告し、彼を引き止めた。すると彼は同意し、留まった。ところが、スルターンであるアブー・ハサンは我々にアービリーを戻すよう求めた。そこで、我々はスルターンに対してうまく弁解したので、彼は引き下がった。そして前述のように^④、「スルターンの艦隊の」難破事件が起こったが、師（アービリー）はチュニスに留まっていた無事であった。そして、我々やわが町の民は競い合うように彼の講義に出席し、学んだのである。

その後、スルターン・アブー・ハサンがヒンタータの山中^⑤で死去し、彼の息子「マリーン朝スルターン」アブー・イナーンが諸々の厄介事^⑥を終えた。そしてアブー・イナーンはアブドゥルワード朝^⑦からトレムセンを奪ったとき、チュニスの君主に手紙を書き、アービリー「の引き渡し」を要求した。ところで当時のチュニスのスルターンは、スルターン・アブー・ヤフヤーの息子アブー・イスハーク・イブラーヒーム^⑧で、ムワッヒドゥーンのシャイフ^⑨、アブー・ムハンマド・イブン・ターフラーギー^⑩の保護下にあった^⑪人物であった。そこでアブー・イスハークはアービリーをアブー・イナーンの使節に引き渡した。

そしてその使節はアービリーと共に、スルターン「アブー・イナーン」の

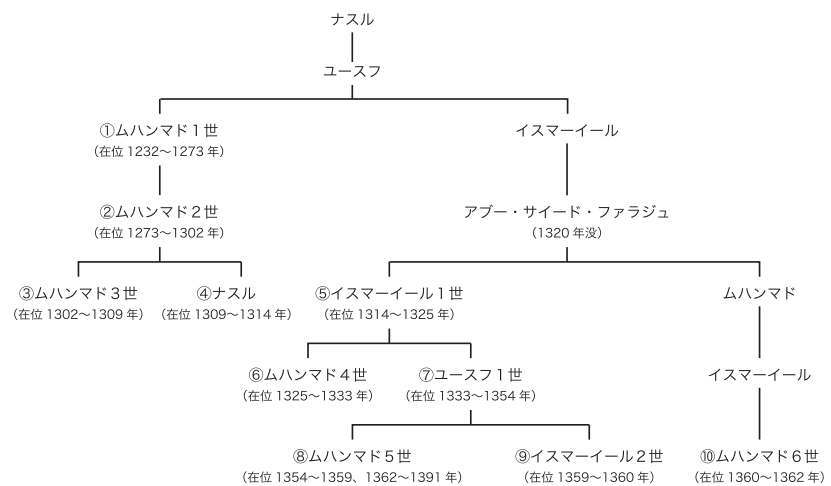
艦隊に乗って出発した。そしてビジャーヤに差し掛かり、その町に入り、一ヶ月間滞在した。その結果、知識を求める人々がその地において、法源学についてのイブン・ハージブ^⑫の『法学と法規定の抄録、および母なる諸書からの集成』をアービリーの許で学んだ。それは彼らが、アービリーや艦隊の長に対してそれを希望したからである。その後、アービリーは出発し、フナインの港に降り立った。そしてトレムセンにいるスルターン「アブー・イナーン」の許へ到着した。そしてスルターンはアービリーを名譽ある地位に置き、ウラマーたちからなる自分の師たちの列に加えた。そしてスルターンはアービリーの許で学び彼から教えを受け、そして七五七／一三五六年にアービリーはフェズにおいて死去した。ところで、アービリー——神が彼を慈しみますように——は、「六八一／一二八二年にトレムセンで生まれた」と私に言っていた。

【ラハウィーの頌詩の註解…アブドゥルムハイミン】

さて、スルターン・アブー・ハサンの書記であるアブドゥルムハイミン^⑬について言うと、彼の出自はセウタであり、その地における彼らの家は旧家で、アブドゥルムハイミン家として知られている。そしてアブドゥルムハイミンの父ムハンマド^⑭は、アザフィー家の治世^⑮においてセウタのカーディーであった。そして彼の息子アブドゥルムハイミンは父の保護下で成長し、セウタの師匠たちから学んだ。そして彼は、特にアブー・イスハーク・ガーフィキ^⑯に師事した。

そしてアンダルスの「ナスル朝の」王族であるライース・アブー・サイード^⑰がアザフィー一族からセウタを奪い、彼らをセウタの名士たちの一団と共にグラナダへ連行したとき^⑱、アブー・サイードは彼らと共にカーディー・ムハンマド・イブン・アブドゥルムハイミンとその息子アブドゥルムハイミンも連行した。その後、アブドゥルムハイミンはその地で学問の習得を完成した。そして彼はグラナダにて、アブー・^⑲「p.39」ジャアファル・イブン・ズバイル^⑳や彼に比肩する者たちから学び、スィーバワイヒの書^㉑に関する知識において卓越した。またイスナードの質の高さと師匠たちの多さにおいて衆に抜きん出た。

そして、マグリブやアンダルスやマシユリクの人々からアブドゥルムハイミンに手紙が届くようになった。そして当時のアンダルスのライースでありワズィールであり、アフマル家（ナスル朝）の廃位されたスルターン^㉒の



系図2 13～14世紀のナスル朝(1232～1391年)

ティリムサーニー⁹⁸などがいた。ところで後者二人は修辭と詩に関して比肩し得る者がいなかった。またこれ以外に、イブン・ハキームの取り巻きたちがいた。ところで彼らについてはイブン・ハティーブ⁹⁹が『グラナダ史』で言及している。

その後、「ズイル・イブン・ハキームが非業の死を遂げ、マリーン朝がセウタを支配する」と⁶⁰、アブドウルムハイミンは『*ʿUyūn al-ʿUyūn*』でセウタに戻り、そこに留まった。その後スルターン・アブー・サイード⁶¹が「マリーン朝の」支配者となったが、彼の息子アブー・アリー⁶²の力が父を凌ぐようになり、王朝の支配権を握った。アブー・アリーは優れた人々を召し、王朝を彼らの存在をもって飾り立てようとした。そこで、アブー・アリーはアブドウルム

許での実力者であったア
ブー・アブドゥッラー・
イブン・ハキーム・ルン
ディー⁵⁵が、彼に書記
になるよう求めた。そこ
でアブドゥルムハイミン
は彼の書記を務めた。そ
してイブン・ハキームは
彼を優れた人々の列に加

えた。イフン・ハキム
のマジユリスにいる人々
の中には、例えばハ
ディース学の徒で偉大な
旅行家たるアブー・アブ
ドゥッラー・イブン・ル
シャイド・ファイフ
リー⁶⁶ やアブー・アッ
バース・アフマド・イブ
ン……アザファイ⁶⁷ や
学者で世捨て人のスー
フィーであるアブー・ア
ブドゥッラー・ムハンマ
ド・イブン・ハミース・

ハイミンをセウタから迎え、「七」二年／一三二二に書記になるよう求めた。その後アブー・アリーは「七」一四／一三二四―五年に彼の父（アブー・サイード）に反抗し、新フェズ⁶³に立て籠もったが、父と締結した和平に基づいて、そこを出発し、スィジルマーサ⁶⁴へ向かった。その際、スルターン・アブー・サイードはアブドウルムハイミンに執心し、彼を書記に取り立て、ついには、彼を書記長の職と書簡や命令の代署職に任命した。彼がその職に就いたのは「七」一八／一三二八―一九年のことであつた。そして「マリーン朝」スルターン・アブー・サイードと彼の息子アブー・ハサンの治世を通じて、その職にあつた。

そしてアブドウルムハイミンはアブー・ハサンと共にイフリーキヤへ向かったが、持病の痛風ゆえにチュニスに留まり、カイラワーンの戦いには参加しなかった。その後「カイラワーンの戦いの」敗戦の報が届いたため、チュニスに騒乱が起こり、スルターンの一党がスルターンの妻たちと共に城砦へと逃げ込んだ。しかし、アブドウルムハイミンは彼らから離れて市中に身を潜め、我々の家に隠れた。それは、住民の嫌悪によってスルターンの一党と共に傷つけられることを恐れたためであった。その後、スルターンがカイラワーンからスースへと脱し、そこから海路チュニスへと出帆した際に、身を隠していたことが明らかとなり、城砦にいる一族と一緒にいなかったことにいら立って、スルターンはアブドウルムハイミンを避けた。そして代署職を、従来その職を独占していたアブー・ファドル・イブン・ライース・アブドゥッラー・イブン・アビー・マドヤン⁸⁵に委ねた。そこで、アブドウルムハイミンは数ヶ月間職無し状態で留まった。その後スルターンは彼を赦し、彼に満足し、*«yadim»*かつての如く代署職に再任した。そしてまもなく、「七」四九／一三四八年に黒死病によってアブドウルムハイミンはチュニスにて死去した。彼の生年は「六」七五／一二七七八年のことであった。また既にイブン・ハティーブが彼についての情報を『グラナダ史』に含めているので、彼について調査したい者は『グラナダ史』を参照された⁸⁶い。

【ラハウイーの頌詩の注解…イブン・リドワーン】

さて、ラハウィーが詩において詠んだ、イブン・リドワーン⁸⁷について
 言うと、これはアブー・カースイム・アブドゥッラー・イブン・ユースフ・
 イブン・リドワーン・ナツジャーリーのことである。彼はアンダルスの出身

であり、マラガで成長した。その地の師匠達から学び、アラビア語と文芸（アダブ）に熟達し、諸学を習得、韻文と散文をよくした。彼は書状作成の専門家であり、文書の作成にも精通していた。

彼はタリーファの戦いの後、故郷を離れ、セウタに滞在した。その地でスルターン・アブー・ハサンと出会い、彼に頌詩を捧げた。そして、イブン・リドワーンは当時、軍隊付のカーディーかつスルターンの説教師⁶⁸を務めていたカーディーのイブラーヒーム・イブン・アビー・ヤフヤー⁶⁹に専ら仕えた。イブラーヒームは彼をカーディー職と説教師職の代理としていたが、その後、アブー・ハサンはスルターンの政庁にある、書記達の間に彼を配した。イブン・リドワーンは書記たちの長であったアブドゥルムハイミンに専ら仕え、彼から学んだ。やがてスルターンがイフリーキヤへと出立した。

カイラワーンの戦いが起こると、「チュニスに残されていた」スルターンの一派は、彼の家族や妻妾とともに、チュニスの城塞にて包囲された。スルターンは、彼の部下達の一団と共に、このイブン・リドワーンをチュニスに残していた。そこで、イブン・リドワーンはこの包囲中に、彼らにとって問題となった書簡のやりとりにおいて頗る頭角を現し、その「書簡のやりとり」大部分を担い、その際に最善の働きをした。ついにスルターンがカイラワーンから帰還すると、イブン・リドワーンに対して、「p.40」側近くで仕える榮譽を与え、大いに重用した。

やがてスルターンは、既に述べたように、「七」五〇／一三四九年に艦隊を率い、マグリブへ向けてチュニスを後にした。スルターンは息子のアブー・ファドル⁷⁰をチュニスにおける代理とし、アブー・カースイム・イブン・リドワーンを息子のために書記として残した。イブン・リドワーンはしばらくの間そのようにして過ごしたが、その後、ムワッヒドゥーンのスルターン、ファドル・イブン・スルターン・アビー・ヤフヤー⁷¹が、彼らからチュニスを奪取し、アブー・ファドルは父のもとへと落ち延びた。イブン・リドワーンは彼に同行できず、一年ほどチュニスにとどまり、それから、海路アンダルスへと旅に出た。アルメリアでは、そこにいたスルターン・アブー・ハサン一派と過ごしたが、彼らの中には、スルターン・アブー・ハサンの妻妾と息子の保護者である、ヒンタータ族のシャイフ、アーミル・イブン・ムハンマド・イブン・アリー⁷²がいた。アブー・ハサンは出立するさい、チュニスから妻妾と息子をアーミルとともに船に乗せたので

ある。彼ら一同はアンダルスに到着し、アルメリアに腰を据え、その地でアンダルスのスルターンから日々の糧を得て暮らした。イブン・リドワーンは彼らと合流し、ともに過ごした。アンダルスのスルターン、アブー・ハッジャージュ⁷³は、イブン・リドワーンを招請し、書記となるよう求めたが、彼は固辞した。

その後、スルターン・アブー・ハサンは亡くなり、アルメリアにいた彼の遺族はその地を後にした。彼らはスルターン・アブー・イナーンのもとを訪問し、イブン・リドワーンも彼らとともにアブー・イナーンを訪ねた。アブー・イナーンは、彼に対して、父（アブー・ハサン）に仕えていた時の働きを認め、彼に書記を務めるよう要請した。またアブー・イナーンは彼の側近くにいる知識人とともに、彼のマジユリスに列席する榮をイブン・リドワーンに与えた。ムハンマド・イブン・アビー・アムル⁷⁴はその当時、王朝の第一人者で、「スルターンとは」親しく部屋に通うような間柄であった。代署の書き手で、税金と軍隊の管理人を務め、スルターン（アブー・イナーン）の寵愛を受け、「p.43」親密な間柄であった。イブン・アビー・アムルはイブン・リドワーンを配下とし、友情と友誼を結び、夜話に参加したり、私的な集まりへ出掛けたりするようになり、血が通い合うような深い親交をはぐくんだ。また彼は、イブン・リドワーンをスルターンに更に近づけ、イブン・リドワーンの市場で彼の商品がたくさん売れるようにした（イブン・リドワーンを売り込んだ）。より重要な事があって自分が不在の折には、自分の職務の代わりをイブン・リドワーンが務めることで良しとした。すると、イブン・リドワーンはスルターンに気に入られ、スルターンのもとで、彼の美德は遺憾なく発揮された。

「七」五四／一三五三年、イブン・アビー・アムルが軍隊を率いてビジャーヤへと遠征すると、イブン・リドワーンはスルターンの書状の作成を一手に担った。その後、イブン・アビー・アムルが帰還したが、スルターンはもはや彼を疎ましく思っていた。そこで彼をビジャーヤへと遠ざけ、彼にビジャーヤとその一帯、およびコンスタンティヌス⁷⁵にいるムワッヒドゥーンとの戦闘を任せた。そしてスルターンはイブン・リドワーン一人に書記職を任せ、かつてのイブン・アビー・アムルのように、彼に代署の職を委ねた。そこで、イブン・リドワーンは一人でその職を占め、イクター地や給与を加増され、威信が増した。その後、スルターンは「七」五七／一三五六年の末になると、イブン・リドワーンを疎ましく思い、代署⁷⁶の

職をムハンマド・イブン・アビー・カースィム・イブン・アビー・マドヤン⁷⁹に任せ、公文書の起草と裁決の記録⁸⁰をアブー・イスハーク・イブラーヒーム・イブン・ハーヅジュ・ガルナーティー⁸⁰に任せた。

スルターン・アブー・サーリム⁸¹の治世になると、スルターンは代署の職を軍務庁長官のアリー・イブン・ムハンマド・イブン・スウード⁸²に任せ、公文書の起草と裁決の記録と枢密文書の扱いをこの書の著者である、アブドゥッラフマーン・イブン・ハルドゥーンに任せた。その後、「七」六二／一三六一年にアブー・サーリムが亡くなると、ワズィールのウマル・イブン・アブドゥッラー⁸³は、「p.044」彼が保護してきたマリーン家の子供達を擁して実権を握った。ウマルは実権を握っていた間中、代署の職をイブン・リドワーンに任せた。スルターン・アブー・ハサンの子アブドゥルアズィーズ⁸⁴が彼を殺害し、彼の権力を奪取したが、イブン・リドワーンは代署の職を保持していた。アブドゥルアズィーズが死亡し、彼の息子のサイード⁸⁵が、ワズィールのアブー・バクル・イブン・ガーズィー・イブン・カース⁸⁶の助けのもと権力を握ったが、イブン・リドワーンはそのまま地位を保持した。

その後、スルターン・アフマド⁸⁷が王権を獲得し、サイードとアブー・バクル・イブン・ガーズィーから権力を奪うと、ムハンマド・イブン・ウスマーン・イブン・カース⁸⁸が彼の治世における実力者として、王朝の実権を握った。しかし、代署の職は、以前と同様に、イブン・リドワーンが保持した。……年⁸⁹、アブドゥッラフマーン・イブン・ブーイファッル・サン・イブン・スルターン・アビー・アリー⁹⁰を包囲するためにスルターン・アフマドがマラクেশ・ヘ親征したさい、イブン・リドワーンはこの職を保持したままアザンムール⁹¹で死去した。

スルターン・アブー・ハサンの一派には、マグリブの有徳者と名士の大集団がいたが、「p.045」彼らの多くはチュニスで黒死病により死亡し、また彼らのうちの一派は、アブー・ハサンの艦隊に乗船していて、艦隊が沈没したさいに溺れ死んだ。一方、彼らのうちには、「イブン・リドワーンのように」様々な災厄が見逃した他の者達もあり、彼らは定められた生涯を全うしたのである⁹²。

【イフリーキヤに到来したマグリブの知識人たち】

イフリーキヤでアブー・ハサンとともにいたウラマーには、マグリブにお

けるクルアーン読誦の大家であった、我らが師、アブー・アッバース・アフマド・イブン・ムハンマド・ザワウイー⁹³がいた。フェズの師匠達から学問とアラビア語を習得し、偉大な旅行家のアブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・ルシャイドからハディースを伝え聞いた。クルアーン読誦の第一人者であり、その分野においては他の追従を許さないほどの才能の持ち主であった。また彼は、これとともに、ダヴィデ家のミズマール⁹⁴のような「美しい」声を持っていた。ザワウイーはスルターンとともにラマダーン月の夜の礼拝⁹⁵をし、時には彼に対して、その「夜の礼拝に割り当てられた」クルアーンの六十分の一⁹⁶を読み聞かせたものであった。

イフリーキヤでアブー・ハサンとともにいた人物には、メクネス⁹⁷出身の人である、法学者のアブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・ムハンマド・イブン・サッバーク⁹⁸がいた。彼は伝承による学問と理性による学問において傑出した人物であり、ハディースとその伝承者達について熟知する者にして、『ムワッタア』の知識とその書の読誦指導に関する第一人者であった。フェズとメクネスの師匠達から諸学問を学び、我らが師、アブー・アブドゥッラー・アービリーと知り合い、彼に師事し、彼から理性による諸学問を学んだ。イブン・サッバークはアービリーのもとで学問修業を完成させ、ついには傑出した存在となった。スルターンは、自らのマジユリスに加えるべく、彼を選び招請した。「p.046」イブン・サッバークはアブー・ハサンとともにいて、最後はかの艦隊にて溺れて亡くなった。

また、彼らのなかには、カーディーのアブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・アブドゥッラー・イブン・アブドゥンヌール⁹⁹がいた。ネドロマ¹⁰⁰地域の出身で、彼の系譜はサンハージャ族¹⁰¹に属していた。彼はマリク派の法学に関して傑出した人物であり、イブン・イマーム兄弟と呼ばれたアブー・ザイドとアブー・ムーサーの二人兄弟のもとでそれを学んだ。彼はこの二人の弟子のうち最も偉大な人物の一人であった。

スルターン・アブー・ハサンがトレムセンを征服したさい、イブン・イマーム兄弟の地位をより高くし、彼ら二人の住む町に関して親しく助言を求めた。アブー・ハサンは、彼の治世において、大勢の知識人を呼び寄せて俸給を与え、自らのマジユリスを彼らで満たした。アブー・ハサンはその当時、イブン・イマームに、自分のマジユリスに配すべき法学者を弟子の中から選定するように求めた。そこでイブン・イマーム兄弟達は彼に対して、このイブン・アブドゥンヌールを推挙し、アブー・ハサンは彼を呼び寄せ、近

くに座らせるようにした。彼に軍隊付のカーディー職を任せた。イブン・アブドゥンヌールはアブー・ハサンの一団に属していたが、「七」四九／一三四八・九九年にチュニスで黒死病により死亡した。

ところで、イブン・アブドゥンヌールは、兄弟のアリー¹⁰²をトレムセンに残していた。このアリーはイブン・イマームの講義において兄弟と共に学んでいたが、アリーは兄弟よりも法学の才能が劣っていた。スルターン・アブー・イナーンが、彼の父であるスルターン・アブー・ハサンへの服従を拒否し、フェズを襲撃すると、アリーを自分の一団に招集し、メクネスのカーディー職を任せた。そこで、彼はしばらくその地に留まり続けた。やがて、既に述べたように¹⁰³、ウマル・イブン・アブドゥッラーが実権を握った。すると、「p.047」アリーは「巡礼の」義務を果たしたいと願い、ウマルは彼の職を解き、彼は「七」六四／一三六三年にメッカ巡礼へと出発した。メッカに到着した後も、以前からの病が癒えず、到来のタワーフ¹⁰⁴の最中に亡くなった。アリーは息子ムハンマドのために巡礼のアミール¹⁰⁵に言い遣し、自分の息子とともに、遺言状をその当時エジプトを支配していたアミールのヤルブガー・ハッサーキ¹⁰⁶に届けるよう託した。そこで、ヤルブガーはムハンマドに関してアリーの代理を良くつとめ、彼が不自由しないよう、法学者達の就くべき職を与え、人々から後ろ指をさされぬよう、彼の面目を守った。ムハンマド——神が彼を許し給うように——は鍊金術¹⁰⁷に傾倒し、彼と同じように鍊金術の過ちを犯した連中に追従していた。彼はこのこと（鍊金術）に勤しみ続け、人々との間で信仰や名譽の問題に関わる悶着を巻き起こし、ついにはエジプトから逃げ出さざるを得なくなった。ムハンマドはバグダード¹⁰⁸にたどり着いたが、これと同様の事態が彼に起こった。そこで、マルディン¹⁰⁹に達し、その地の領主のもとに腰を据え、良くしてもらった。「七」九〇／一三八八年を過ぎて、彼がその地で天寿を全うしたとの報せが我々のところに届いた。神のみが永遠の存在である。

また、彼らのなかには、トレムセンの人である、数学の大家、アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・ナッジャール¹¹⁰がいた。彼は故郷の町で、その地の師匠達および我が師、アービリーから学問を学び、彼を凌駕した。その後、イブン・ナッジャールはマグリブへと旅立ち、セウタにて、『天文学大全』¹¹¹の注釈者である数学の第一人者、アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・ヒラール¹¹²と知り合った。マラケシュでは、イマーム・アブー・アッバース・イブン・バンナーから学んだが、イブン・

バンナーは天文学の知識や法則およびそれに関係することについての第一人者であった。イブン・ナッジャールは多くの知識を身につけてトレムセンへと戻り、宮廷に呼ばれた。アブー・ターシユフイーン¹¹³が死に、スルターン・アブー・ハサンがトレムセンの支配者となると、イブン・ナッジャールを自らの一団に列し、彼に俸給を授与した。そこで、イブン・ナッジャールはアブー・ハサンとともにイフリーキヤへ赴き、黒死病により死亡した。

「p.048」また、彼らのなかには、フェズの人である、アブー・アッバース・アフマド・イブン・シユアイブ¹¹⁴がいた。彼は言語と文芸（アダブ）、および、哲学、数学、医学その他といった理性による諸学問において傑出していた。スルターン・アブー・サイードは彼を書記達の間に配し、医者として俸給を与えた。何故なら、イブン・シユアイブが彼らの中で何れにおいても抜きん出たからである。そういうわけで、イブン・シユアイブはアブー・サイードの書記にして彼の医者ともなったのである。アブー・サイードの後を継いだスルターン・アブー・ハサンとも、このような関係であった。イブン・シユアイブはイフリーキヤに赴き、そこで、かの疫病により亡くなった。彼には、古今の優れた詩人に勝るとも劣らないような詩の作品があった。詩の批評における第一人者で、詩を見る目があった。現在、私が知っている彼の詩の一つに、以下の詩がある。

愛の館は高き地である

そこに住まう者の願いは最も救われがたい

春一番の雨はその館の中庭に朝早くに降り注ぎ

荒れ果てたその低地に跡を残して流れたのだろうか？

あるいは、弱りきったそよ風はそこで夜を過ごし

バーンの樹¹¹⁵やランドの樹¹¹⁶に癒しを求めたのだろうか？

その風は私が待ち望む者達の話を語ってくれる

たとえ彼らが道から外れてしまっていたとしても

その頃、褐色の日陰がそこの私の家であり

青色の水が私の水場であった

若いガゼルの中で、人々の視線が集まる場所

そのガゼルは瞳の縁が濃緑色ですらりとした体躯

そのガゼルは乙女の目で汝を見つめる

愛する者はその目によって自ら進んで殺される

だが、遅れていた災厄と幸運の失墜が
突如として彼らに訪れた

彼らは荒野に失われてしまった

汝の父親に賭けて、私にはその損失を悲しむことなしに生きることなど
できない

彼らのある者は埋葬されてしまった

泥土と墓の中に包まれてしまった

またある者は行方知れずとなり、姿が見えなくなった

見えるのはただ隔絶という荒野と僻遠という砂漠のみ

「p056」彼らの亡き後も、私の人生は続いて行くのか

どうして、私は彼ら全てを失い、私一人になってしまったのだろうか

悲しみに沈む私を罵ることなかれ、我が友よ

私は見せているよりも遥かに大きな悲しみを隠しているのである

西方に、私は住まいを持っている

それを思い出すと、絶え無き不眠が私のもとに夜ごと戻ってくるのだ

二羽の若鳥が、助けてくれる者達もおらず救いも無い、危険に満ちた場所に
置き去りにされてしまった

【イフリーキヤに到来したマグリブの知識人たち・イブン・マルズーク】

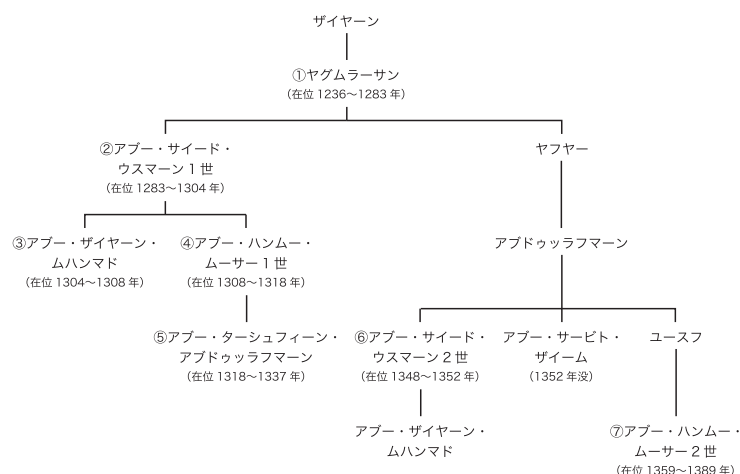
また、彼らのなかには、トレムセンの人である、我らが友で説教師のア
ブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・アフマド・イブン・マルズー
ク¹⁷がいた。彼の先祖達は、シャイフ・アブー・マドヤン¹⁸の存命中にそ
の従者であった父祖以来、ウツバードで、彼のもとに留まり、「彼の死後も」
その墓廟を代々守り仕えてきた。その名をアブー・バクル・イブン・マル
ズーク¹⁹という五代か六代前の彼の祖先は、彼らの中でも神に近いこ
と²⁰で知られていた。アブー・バクルが亡くなると、アブドゥルワード族
出身のトレムセンのスルターンである、ヤグムラーサン・イブン・ザイヤー
ンは自らの城塞にある墓地に彼を埋葬した。ヤグムラーサン自身に定め
の死が訪れたさいに、彼の傍らに埋められたがためであった。

このムハンマド「イブン・マルズーク」はトレムセンで成長した。彼自
身が私に語ったところによると、七一〇／一三二〇一年の生まれである。
イブン・マルズークは父²¹とともにマシユリクへ旅立った。父親は高貴な
る両聖都（メッカおよびメディナ）において聖域の隣人となったが²²、彼

自身はカイロへと戻っていった。そして、その地に滞在し、ブルハヌッ
ディーン・サファークスィー・マリーキー²³とその兄弟のもとで学び、
p050「学究とハディース伝承において傑出した存在となった。イブン・マル
ズークは二つの書体²⁴による書道に熟達していた。」

その後、「七」三五／一三三四―五年にマグリブへと戻り、スルターン・
アブー・ハサンがトレムセンを包囲している最中に、彼と面会した。ア
ブー・ハサンは既にウツバードに大きなモスクを建設しており、イブン・マ
ルズークのおじであるムハンマド・イブン・マルズーク²⁵が、ウツバード
における彼ら一族の慣習に従って、そのモスクで説教師をしていたが、亡く
なった。そこで、スルターンはイブン・マルズークをおじの代わりにこのモ
スクの説教師職に任命し、彼が説教壇の上からフトバを行い、スルターンを
称賛し、誉め称えるのを聞いた。ムハンマドはアブー・ハサンに気に入ら
れ、アブー・ハサンは彼を寵愛し、側に置いた。これとともに、イブン・マ
ルズークは二人のシャイフたるイブン・イマーム兄弟の講義に列席し、優れ
た者達や偉大な者達と知り合いになり、彼らから学問を学ぶように心を決め
た。スルターンは日に日に彼を重用していった。イブン・マルズークはア
ブー・ハサンに同行してタリーファの戦いに赴いたが、そこにはムスリム達
への試練があった。アブー・ハサンはアンダルスの支配者への使節としてイ
ブン・マルズークを用いていた。

その後、アブー・ハサンがイフリーキヤを獲得すると、和平の締結とタ
リーファの戦いのさいに捕虜とされた彼の息子アブー・ウマル・ターシュ
フィーン²⁶の救出のために、イブン・マルズークはアブー・ハサンの使者
として、カステイリヤの王であるイブン・アルフォンソ²⁷のもとへ旅に
出た。そのため、この旅の途上にあつて、カイラワーンの戦いには居合わせ
なかった。イブン・マルズークはアブー「ウマル」²⁸・ターシュフィーン
を連れ、王からの使節としてやってきたキリスト教徒の貴族の団を率いて
戻ったが、イフリーキヤ地方のコンスタンティヌスで、カイラワーンの戦い
の報せが彼ら一行に届いた。コンスタンティヌスには、スルターンの代官と
駐屯軍がいたが、その地の住民達は皆集まって彼らに対して反乱を起こし、
彼らから略奪した。住民達は「ハフス朝」スルターン・アブー・ヤフヤーの
子ファドルの名によりフトバを実施し、ムワッヒドゥーンの支配を再び承認
し、ファドルを招請した。そこで、ファドルは彼らのもとへやってきて、町
を支配した。イブン・マルズークはその地を離れ、名士や代官、諸王からの



系図3 13～14世紀のザイヤーン朝(1236～1389年)

使節の一団とともに、
マグリブへと帰還して
いった。¹²⁹

そして、アブー・ハサンお気に入りの愛妾である、スルターン・アブー・イナーンの母¹³⁰とともに、フェズにいたスルターン「アブー・イナーン」のもとを訪れた。というのも、アブー・イナーンの母は、アブー・ハサンを追って旅していたが、コンスタンティヌスでの事件の報が彼女に届くと、『p.051』不安になった。そして、彼女のもとに、息子であるアブー・イナーンが

父親の王権を奪ひフェズを征服したとの報せが届いた。そこで、この母親はアブー・イナーンのところに戻り、イブン・マルズークは彼女に仕えて同行したのである。それから、イブン・マルズークはトレムセンへ赴くことを望んだので、アブー・イナーン達は彼の任を解いてそこへ向かわせた。彼はウッバードにて祖先達と同様に過ごした。

この当時トテムセンには、アブー・サイード・ウスマーン・イブン・アブドゥッラフマーン・イブン・ヤフヤー・イブン・ヤグムラーサン・イブン・ザイヤーン¹³¹がいた。彼の部族であるアブドウルワード族は、彼らについて前述したように¹³²、カイラワーンの戦いの後、当時イブン・ターフラーギーンが「マリーン朝軍が駐屯するチュニス¹³³の」城塞を包囲している時に、チュニスにて彼に忠誠を誓っていた。そしてアブドウルワード族はトテムセンに向かったのだが、そこで彼らの王家の一員であるアブー・サイード・ウスマーン・イブン・ジャッラール¹³⁴の姿を目にした。イブン・ジャッラール

ルは、スルターン・アブー・イナーンが父に対して反乱を起こしフェズへ進
攻するにさいしてトレムセンにおける代官に任じられていたが、アブー・イ
ナーンのフェズ侵攻の後に反乱を起こして、自立を宣言していたのである。
そこで、「アブー・サイード・」ウスマーン・イブン・アブドウツラフマー
ンは、兄弟のアブー・サービト¹³⁴や彼らの一族であるアブドウルワード族と
ともにイブン・ジャッラルに立ち向かった。そして、彼らはトレムセンを
イブン・ジャッラルから奪取し、彼を捕らえて殺害した。こうして、ア
ブー・サイードがトレムセンの王権を得て、兄弟のアブー・サービトが彼に
次ぐ地位についた。

それから、「マリーン朝」スルターン・アブー・ハサンがチュニスから船に乗り込んだが、彼の艦隊は沈んでしまった。スルターン・アブー・ハサンはアルジェへと逃れ、その地に落ち着いた。そして、軍を集めてトレムセンへ向かった。

この際にアブー・サイドは、アブー・ハサンと連絡を取り、彼の西進から自分たちを防ごうと考えた。そして、この交渉のためにハティーブ・イブン・マルズークを選んだ。アブー・サイドはイブン・マルズークを召しだし、彼にスルターン・アブー・ハサンとの会見に対する口上を託した。それで、イブン・マルズークはこの「役目の」ために砂漠の道をとった。アブー・サードと彼らの一族であるアブドゥルワード族はこの情報を知り、アブー・サイドに対してこの交渉について同意せず、彼を非難した。しかし、アブー・サイドは素知らぬふりをした。それで彼らは、イブン・マルズークを妨害するためにスカイル・イブン・アーミル³⁹を派遣し、スカイルはイブン・マルズークを連れ戻した。それから、彼らはイブン・マルズークを数日の間捕らえ、海を越えアンダルスへと追放した。そして、イブン・マルズークは「ナスル朝」スルターン・アブー・ハッジャージュのもとでグラナダに落ち着いた。というのもタリーファの戦いのすぐあとで、セウタでのスルターン・アブー・ハサンのマジユリスで彼と出会って以来の縁があったためである。

そして、アブー・ハッジャージュは以前からのよしみでイブン・マルブークを保護し、彼をそばに置き、アルハンブラ³⁶のモスクの説教師職に据えた。イブン・マルブークは、アブー・イナーンの父、アブー・ハサンが逝去し、アブー・イナーンの支配権がトレムセンとその諸地域に及んだ後の「七」五四／一三五三年に、スルターン・アブー・イナーンに召されるまで

その説教師職に留まった。

[[p.052]] イブン・マルズークがアブー・イナーンののもとに着くと、スルターンはイブン・マルズークとの縁を大切にし、自分のマジユリスに集う人々の出席者の上席においた。イブン・マルズークは、スルターン御前の学問のマジユリスにおいてクルアーンを朗誦し、マジユリスの場で進講する人たちとともに、彼の順番になると進講をおこなった。

その後、スルターン・アブー・イナーンはチュニスを領有した「七」五八／一三五七年に、「ハフス朝」スルターン・アブー・ヤフヤー¹³⁷の娘との間に婚姻を結ぶために、チュニスへとイブン・マルズークを派遣した。しかし、アブー・ヤフヤーの娘はこの婚姻を拒み、チュニスに身を隠した。そして、アブー・イナーンに対しイブン・マルズークが彼女の居場所について知っているという誹謗が起きた。そのためアブー・イナーンはイブン・マルズークに対し立腹し、コンスタンティヌスから戻っていった。それから、チュニスの人々は、チュニスにいた役人や守備兵などの人々に対して反乱をおこし、アブー・ムハンマド・イブン・ターフラーギーンをマフデイーヤ¹³⁸から招請した。それで、イブン・ターフラーギーンはチュニスにやってきて、その地域を領有した。そのためマリーン朝の人々は、艦隊に乗り込みトレムセンの停泊所に留まった。一方、スルターン・アブー・イナーンはイブン・マルズークの捕縛を命じ、このためにスルターンの近衛兵¹³⁹の司令官である、ヤフヤー・イブン・シュアイブ¹⁴⁰が出発した。イブン・シュアイブは、イブン・マルズークをテッサラ¹⁴¹で見つけ、そこで彼を捕らえてスルターンのもとへと彼を連行した。スルターンは彼を呼び出し、厳しく非難した。そしてしばらくのあいだイブン・マルズークを監禁したが、自らの死の直前に解放した。

それから、スルターン・アブー・イナーンの死後にマリーン朝は混乱に陥った。マリーン家の一部は、ヤアクーブ・イブン・アブドゥルハックの子孫のある有力者¹⁴²に忠誠を誓った。そして、彼らは新フェズを包囲したが、そこにはアブー・イナーンの息子のサイード¹⁴³とそのワズィールで実権を握るハサン・イブン・ウマル¹⁴⁴がいた。

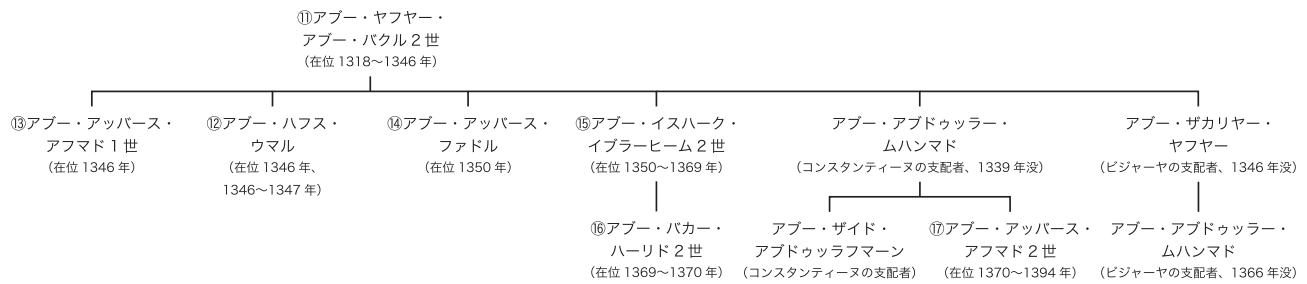
ところで一方、アブー・サーリムは当時アンダルスにいたが、それというのもスルターンのアブー・ハサンの死後にアブー・サーリムの兄弟であるスルターンのアブー・イナーンが、アブー・サーリムと彼の従兄弟であるアブー・アリーの子らをすべて捕え、アンダルスへと追い出したからであっ

た。アブー・イナーンの死後、アブー・サーリムは、マグリブの王位に就くことを望んだ。[[p.053]]しかし、当時スルターン・アブー・ハッジャージュの息子¹⁴⁵にたいして実力を持ち、アンダルスの実権を握っていたリドワーン¹⁴⁶が彼を阻止した。それで、アブー・サーリムは敵地¹⁴⁷にあつたセビーリヤに行き、当時それらの地の王であつたペドロ¹⁴⁸のもとに着いた。それから、ペドロはアブー・サーリムのために船を用意し、「対岸」(マグリブ)へと渡らせた。それから、アブー・サーリムはグマール族¹⁴⁹の土地にあるサフィーハ山¹⁵⁰に逗留した。そして、この山の民であるムスニ族¹⁵¹とムニール族¹⁵²の人々がアブー・サーリムの呼びかけに応じ、彼の企ては果たされて王位についた。このことの詳しい情報は、マリーン朝についての話の中で彼について説明した¹⁵³。

イブン・マルズークはアブー・サーリムがアンダルスにいた頃から連絡を取り、彼のために働くことを申し出て、彼と諸々のことについて相談した。また、アブー・サーリムがサフィーハ山にいた頃にも書をやりとりし、彼の一族の指導者たちに働きかけを行い、彼の権力獲得に向けて動いていたようである。

スルターン・アブー・サーリムが王位についたとき、彼はイブン・マルズークの働きすべてをよみして彼を保護した。そして、彼を人々の上位に置き、彼を寵愛し、彼に自分の手にある権力の手綱を託した。こうして、人々は彼の後に従い、王朝の名士たちは彼の門をたたき、彼になびいた。しかし、このために宮廷の人々は彼に嫉妬し、彼のことで人々は怒りをスルターンへと向けた。そして、人々は機会を待ち続け、とうとうウマル・イブン・アブドゥッラーが新フェズを襲った。人々はスルターンから離反し、「七」六二年の終わり／一三六一年九月にウマル・イブン・アブドゥッラーはアブー・サーリムを殺害した。また彼は、イブン・マルズークを投獄し、彼が擁立したスルターン・ムハンマド・イブン・「アビー・」アブドゥッラフマーン・イブン・アビー・ハサン¹⁵⁴にイブン・マルズークについての処断を促した。そこで、スルターンはイブン・マルズークを尋問し、財産を没収した。宮廷の人々の多くがイブン・マルズークを処刑することを望んだが、それを禁じたうえで、解放した。

それから、イブン・マルズークは「七」六四／一三六二三年にチュニスに入った。そして、「ハフス朝」スルターン・アブー・イスハークと王朝の実力者でスルターンに影響力のあるアブー・ムハンマド・イブン・ターフ



系図4 14世紀のハフス朝 (1318~1394年)

ラーギーンのもとに逗留した。¹⁰⁴ 彼らはイブン・マルズークの到来を歓待し、チュニスのムワッヒドゥーン・モスク¹⁰⁵の説教師職に就けた。そして、スルターン・アブー・イスハークが「七」七〇／一三六九年に亡くなるまで、その地位にいた。

その後、アブー・イスハークの息子のハーリド¹⁰⁶がスルターン位に即いたが、「七」七二／一三七〇年にスルターン・アブー・ヤフヤーの孫であるスルターン・アブー・アッパース¹⁰⁷が、彼の本拠地であるコンスタンティヌスからチュニスへと進軍し、チュニスを占領してハーリドを殺害した。

しかし、イブン・マルズークはこのアブー・アッパースに対して疑念を持っていた。というのも、彼がフェズにいたころ、ビジャーヤの支配者でアブー・アッパースの従兄弟であるアブー・アブドゥッラー・ムハンマド¹⁰⁸の味方をしており、スルターン・アブー・サーリムのもとでアブー・アッパースよりもアブー・アブドゥッラー・ムハンマドに好意を持っていたからである。果たして、スルターンとなったアブー・アッパースはイブン・マルズークをチュニスの説教師職から解任したのであった。彼はこれを黙って受け入れ、東方への旅を決意した。そして、スルターンは彼にそれを許した。

それから、イブン・マルズークは海路

を東へと向かい、アレクサンドリアで下船してカイロへと移動した。そして、彼は知識人や王朝のアミールたちと会見し、彼らのもとで彼の持っている商品を売り込んだ（知識を披歴した）。そして、知識人やアミールたちは、彼をスルターンに接見させた。当時のスルターンはアシユラフ¹⁰⁹であった。その結果、イブン・マルズークはスルターンのマジュリスに出席するようになり、学問にかかわる諸々の職を与えられた。それで、彼は生活の糧をそこから得る手段を得た。ところでイブン・マルズークをスルターンに引き合わせたのは、スルターンのウスターダール¹¹⁰であるムハンマド・イブン・アクブガー・アース¹¹¹で、彼はイブン・マルズークがカイロにやってきた始めのころに会見した人物であった。ムハンマド・イブン・アクブガー・アースはイブン・マルズークを気に入り、彼を機知に富んだ人物であると見出した。ムハンマド・イブン・アクブガー・アースは彼のために骨を折り、そしてそれは上述のように功を奏したのであった。

その後、イブン・マルズークは、カイロに居を落ち着け、そこで彼は尊敬される地位に置かれ、高德の人物として知られるようになった。また、しばしばマリーク派のカーディーの候補として推されたり、彼の職務において教育活動をつづけたりして、ついに「七」八一／一三七九年に同地で亡くなった。¹¹²

『p.055』(1)までがスルターン・アブー・ハサンの一行の中で同席した、我々の師たちと我々の友人たちの説明である。しかし、この本の目的は冗長に書くことではないので、このあたりで止めておく。それでは話を著者のことへと戻す。

【註】

(1) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」、四〇頁参照。

(2) 校訂者イブン・タウウィートは、一七世紀に書かれたイブン・カーディーによるフェズの人名辞典に依拠して、彼の名をムハンマド・イブン・アリー・イブン・スライマーンと補っている。しかし、ブーラーク版やイブン・ハルドゥーン自伝の諸写本にアリーという名が見られないこと、自伝本文中でもすぐ後でサッティの父の名をスライマーンと明記していることから、ここではイブン・タウウィート説をとらなかった。ただし、依然として疑問は残る (al-Ibar, vol. 7, p.

- 389; Ibn al-Qāḍī, *Jadhwat al-iqibās fi dhikr man halla min al-a'lām madinat Fās*, ed. 'Abd al-Wahhāb Ibn Mansūr, Rabat: Dār al-Mansūr, 1973-4, pp. 228-229)。
- (3) サッタ族はサンハーージャ系のベルベル部族で、イブン・ハルドゥーン時代の現在のモロッコ中部の平原地帯に住み、定住農耕を行っていた (*al-ʿIbar*, vol. 6, p. 206)。一方、その祖とされるアウラバ族は、七〜八世紀には勢力のきわめて大きな部族で、アラブの征服に激しく抵抗した後に西方へ移住し、現在のモロッコに至ったという。八世紀末にはシア派の反乱に失敗して亡命してきたイドリースを擁してイドリース朝を建国した (*al-ʿIbar*, vol. 6, pp. 145-147)。
- (4) Abū al-Hasan al-Sughayyir, 'Alī ibn 'Abd al-Haqq al-Zarwī (一三一九―二〇年没)。フェズのマールク派法学者で、短軀で知られた。ターザのカーディーを経て、一三〇九年、フェズの大カーディーに任命された (*al-ʿIbar*, vol. 7, p. 240; Ibn al-Qāḍī, *Jadhwat al-iqibās*, p. 472)。
- (5) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」、五一頁、註八六参照。
- (6) Abū al-Hasan al-Lakmī, 'Alī ibn Muḥammad al-Rabʿī (一〇八五―六年没)。カイラワーン出身でスファークスで活躍したマールク派法学者。サフヌーンのマールク派法学者『編纂 *al-Mudawwana*』に対する注釈として『教示の書 *al-Tabṣira*』を著した (*al-Qāḍī 'Yād, Tarṭīb al-mudarik wa taqrīb al-musalik li-na'rifat a'lām maḥhab Malik*, ed. Muḥammad ibn Tāwī et al., Rabat: Wizārat al-Awqāf wa al-Shu'ūn al-Islāmiya, 1966-1983, vol. 8, p. 109)。「編纂」はマグリブ・アングダルスのマールク派法学にとつて最も権威ある著作で、ラフミーはじめ多くの法学者が要約・注釈などを残した(「イブン・ハルドゥーン自伝2」、五〇頁、註八一、註八二；『歴史序説』第三卷、二二二―二二三頁)。
- (7) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」、五三頁、註一三七参照。
- (8) Abū 'Iḥān Fāris ibn Abī al-Hasan 'Alī, マリーーン朝第二代君主アブー・イナーン・ファールリス(在位一三四八―一三五八年)。父アブー・ハサンがカイラワーンの戦いで戦死したとの誤報を受け、即位を宣言した。父の死後、マリーーン朝の全権を掌握した。トレムセン征服(一三三二年)やチュニス征服(一三三七年)など、父王と同様にマリーーン朝の軍勢力がマグリブ全土を席卷する時代をもたらした (*al-ʿIbar*, vol. 7, pp. 278ff; Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, Cambridge: Cambridge University Press, 1987, pp. 111-113)。
- (9) cf. *al-ʿIbar*, vol. 6, pp. 360-361; vol. 7, pp. 284-285。
- (10) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」、四〇―四一頁参照。
- (11) Abūla (現Avila)。マドリードの北西に位置するスペイン中部の都市。イスラーム期にはそれほど重要な地ではなく、アラビア語史料は多くの情報を語っていない。遅くとも一二世紀初めにはキリスト教徒支配下に入っていた。一方、一三世紀末

までには比較的大きなムデハル共同体が存在しており、トレードからのムスリム移住者により形成されたものと考えられている (cf. L.P. Harvey, *Islamic Spain 1250 to 1500*, Chicago: The University of Chicago Press, 1990, pp. 68-69)。

- (12) Yaghmurasan ibn Zayyān, ザイヤーン朝初代君主ヤグムラーサン・イブン・ザイヤーン(在位一二三六―一二八三年)。ムワッヒド朝末期の混乱に乗じてトレムセンで自立し、ザイヤーン朝を建国した (Yahyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-rnwād fi dhikr al-mulūk min Bani 'Abd al-Wād*, Algiers: al-Maktaba al-Wataniya, 1980, pp. 204-207; *al-ʿIbar*, vol. 7, pp. 78ff; Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, pp. 135-136)。
- (13) ヤグムラーサンの子アブー・サイード・ウスマーン Abū Sa'īd Uthmān (在位一二八三―一三〇四年)のことであろう。父の後を継いだが、一二九九年以降、マリーーン朝による大規模なトレムセン包囲に見舞われ、その中で没した (Yahyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-rnwād*, pp. 208-210; *al-ʿIbar*, vol. 7, pp. 91ff)。
- (14) Muḥammad ibn Ghālībūn, 不詳。ザイヤーン朝の歴史を著したヤフヤー・イブン・ハルドゥーンの伝えるヤグムラーサン・イブン・ザイヤーンおよびその息子アブー・サイード・ウスマーン治世のカーディー一覧の中には、この名は見あたらない。アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・マルワーンという名があるのがこの人物のことかも知れない (cf. Yahyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-rnwād*, pp. 205, 208)。
- (15) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」、五四頁、註一五二参照。
- (16) Hunayn, トレムセンの北方、地中海に面した港町。ムワッヒド朝期から繁栄し始め、一四世紀にはトレムセンの外港として、サハラ交易と地中海交易とを連結する役割を担った (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "Hunayn")。
- (17) Tawarīḥ. 現モロッコ東部の都市。フェズからトレムセンへ向かう途上に位置する。一二九四年、マリーーン朝君主アブー・ヤアクブ・ユースフが、それまでマリーーン朝とザイヤーン朝の境界地域だったこの地域を占領し、砦を築いた (*al-ʿIbar*, vol. 7, pp. 219-220)。
- (18) al-jund al-andalusīyūn. 一三世紀前半のレコンキスタの進展の結果、アングダルスから多くの移民が北アフリカに流入していたため、マリーーン朝ではアングダルス出身者から成る部隊が作られていた (Muḥammad al-Manūn, *Waraqāt 'an baḥār al-Marīnīn*, Rabat: Jamī'at Muḥammad al-Khāmis, 1996, pp. 99-100)。
- (19) al-musṭh. 繊維目の粗い羊毛の衣服を指すものと思われる。cf. R. Dozy, *Dictionnaire détaillé des noms des vêtements chez les arabes*, Amsterdam, 1845, p. 406。
- (20) Ribā' al-'Ubbād. ウッバードは、トレムセン東郊の丘で墓地。ここには著名なスーフィー、アブー・マドヤン(一二九八年没)の墓廟があり、多くの参詣者を集めるとともに、スーフィーたちの修行の場となっていた (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd

edition, “Tijmsan”)。アブー・マドヤンについては、註一一八参照。

- (21) Karbalā', イラク南部の地名。第四代正統カリフ、アリー・イブン・アビー・タリブの次男フサインがウマイヤ朝軍の攻撃により六八〇年に殺害された場所。フサインの墓廟があり、現在に至るまでシリア派の重要な参詣地となっている。

- (22) Banū al-Husayn. カルバラで殺害されたフサインの後裔。フサインの母ファアティマを通じて、預言者ムハンマドの血統を伝える一族である。なお、『歴史序説』には「ファアティマ家問題について、これに対する人々の意見と真相」と題する長い一節があり、ファアティマの末裔がマフディー（救世主）として到来するという信仰について論じている。その節の中にもこれと同じ逸話が収録されている（『歴史序説』第二巻、三七〇頁）。マグリブ・アンダルス史においては、一〇世紀のファアティマ朝の例をはじめとして、ファアティマの末裔を名乗る人物がマフディーとして蜂起する事例が数多く見られ、この逸話もそうした文脈で理解すべきであろう。cf. Mercedes Garcia-Arenal, *Messianism and Puritanical Reform. Mahdīs of the Muslim West*, Leiden: Brill, 2006, p. 207.

- (23) ḡhusl. 性交や夢精によって身体が穢れた際に、水ないし砂で体を清めること。牧野信也訳『ハディース イスラーム伝承集成』中央公論新社（中公文庫）、二〇〇一年、第一巻、一〇一―二九頁参照。

- (24) kāfir (camphon), C₁₀H₁₆O. クスノキの木部から得られるテルペン系ケトン化合物。刺激性の特有な臭いと強烈な芳香性の味を有す。防虫剤や外用医薬品として用いられる。服用すると、嘔吐、眩暈、興奮、癲癇様発作、意識障害などの症状が現れる（『防虫剤』『有毒・有害物質が分かる事典』吉岡安之編、日本実業出版社、一九九六年、五〇―五一頁；「しょうのう 樟脳」『化学大辞典』共立出版、二〇〇三年、第四巻、八一―頁；（財）日本中毒情報センター H P 中毒情報データベース「カンフル」(<http://www.j-poison-ic.or.jp/>)。

- (25) Taqī al-Dīn Ibn Daqīq al-ʿId, Abū al-Faḥ Muhammad ibn ʿAlī ibn Wabb ibn Muḥ al-Qushayrī al-Qūṣṭ al-Shāfiʿī (一一三〇年没)。はじめマリーク派に属していたが、後にシャフィイー派に転向し、大カーディーを務めた人物。伝承諸学、理性的諸学両分野に優れた学者で、スプキーは彼を評して「ビジュラ七世紀初頭において神より遣わされた学者 al-ʿālim al-mabʿūth であり、ハディースに関して名高き人物」と言っている（al-Subkī, *Tabaqāt al-shāfiʿiyya al-kubrā*, ed. Mahmūd Muhammad al-Tanāḥī & ʿAbd al-Fattāḥ Muhammad al-Hijwī, 10 vols., Cairo: Dār Iḥyāʾ al-Kutub al-ʿArabiyya, 1964-76, vol. 9, pp. 207-249; Ibn Taghribirdī, *al-Nujūm al-zāhira fī mulūk Miṣr wa al-Qāhira*, ed. Ibrāhīm ʿAlī Fuḥmān et al., Cairo, 1963-72, vol. 8, pp. 206-207; al-Suyūṭī, *Huṣn al-mulāḍara fī taʾrīḥ Miṣr wa al-Qāhira*, ed. Muḥammad Abū al-Faḍl Ibrāhīm, 2 vols, Cairo, 1968-69, vol. 1, pp. 317-320; Ibn Kathīr, *al-Bidāya wa al-nihāya*,

Cairo: Dār al-Rayḥān, 1988, vol. 14, pp. 28-29)。

- (26) Ibn al-Rifʿa, Najm al-Dīn Abū al-ʿAbbās Ahmad ibn Muḥammad ibn ʿAlī ibn Murṭafī al-Anṣārī al-Shāfiʿī (一一三〇年没)。カイロのムイッズイーヤ・マドラサの教授職やフスタートのムフタスィブ職を司った。シャフィイー派法学者として当代随一の名声を博していたようである（al-Subkī, *Tabaqāt al-shāfiʿiyya*, vol. 9, pp. 24-27; Ibn Taghribirdī, *al-Nujūm al-zāhira*, vol. 9, p. 213; al-Suyūṭī, *Huṣn al-mulāḍara*, vol. 1, p. 320)。
- (27) Saḥī al-Dīn al-Hindī, Muḥammad ibn ʿAbd al-Rahmān (or al-Rahīm) ibn Muḥammad al-Umawī (一一一五―一五六六年没)。インド生まれの法源学者、神学者。スプキーによると、サフィーユッディーンは二二八六年以降タマスクスに居を構えており、またイブン・カスィールは二二〇六年一月二十四日にタマスクスにてサフィーユッディーンとイブン・タイシーヤが面会している情報を伝えている。このため一三〇〇年以後にカイロに向かったアービリーは、実際には彼に出会っていない可能性が高い（al-Subkī, *Tabaqāt al-shāfiʿiyya*, vol. 9, pp. 162-164; Ibn Kathīr, *al-Bidāya wa al-nihāya*, vol. 14, pp. 39, 77; al-Suyūṭī, *Huṣn al-mulāḍara*, vol. 1, p. 544)。

- (28) al-Taḥṭīzī, Tāj al-Dīn Abū al-Ḥasan ʿAlī ibn ʿAbd Allāh (一一四五―一五六六年没)。シャフィイー派法学者でカイロのアミール・フサームッディーン・トゥルンターイ・マドラサ al-Madrasa al-Husayniyya (cf. al-Maqrīzī, *al-Mawāʿiz wa al-iḥbār bi-dhikr al-khiṭaʾ wa al-zhikr*, 2 vols., Baghdad, 1975, vol. 2, pp. 386-387) の教授職を務めた人物である（al-Subkī, *Tabaqāt al-shāfiʿiyya*, vol. 10, pp. 137-138; Ibn Taghribirdī, *al-Nujūm al-zāhira*, vol. 10, p. 145; al-Suyūṭī, *Huṣn al-mulāḍara*, vol. 1, p. 545)。

- (29) Ibn al-Baḍī, 不詳。

- (30) Bīlād Zawāwa. ザワワはベルベルの部族集団の名。彼らの居住地はビジャーヤの背後の山岳地帯であり、それにちなんでこの一帯もザワワと呼ばれるようになった（*al-Iḥbār*, vol. 6, p. 128)。

- (31) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」五二頁、註九九参照。

- (32) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」五二頁、註一〇三参照。

- (33) Abū al-Rabīʿ Sulaymān ibn Abī ʿĀmir ʿAbd Allāh ibn Abī Yaʿqub Yūsuf. マリーン朝第九代君主アブー・ラビーウ・スライマーン（在位一一三〇―一一三二〇年）。トレムセン包囲中にマリーン朝君主アブー・ヤアクープ・ユースフが暗殺された後、その孫アブー・サービト（在位一一三〇―一一三〇八）が後を継いだ。これも一年足らずで病没したため、もう一人の孫アブー・ラビーウが即位した。父王が包囲していたトレムセンのザイヤーン朝や、セウタをめぐる対立していたナスル朝との和解につとめた（*al-Iḥbār*, vol. 7, pp. 237ff)。

- (34) Khalīf al-Maḡhīr. 不詳。マギーラ族はマグリブ各地に住むベルベル系部族で、フェズの近郊にも居住している。マリーン朝下のフェズにもこの部族出身でマ

ギーリー家という裕福なウラマー家系がいたことは確認できる。しかし、マギーラ族のユダヤ教徒の存在は確認できていない (Anonymous, *Buyūtāt Fās al-kubrā*, ed. 'Abd al-Wahhāb ibn Mansūr, Rabat: Dār al-Mansūr, 1972, p. 21; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "Maghila").

(35) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」, 五二頁, 註一〇五参照。

(36) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」, 五二頁, 註一〇六参照。

(37) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」, 五五頁, 註一六五参照。

(38) cf. *al-'Ibar*, vol. 7, p. 284.

(39) Jibāl Himaia. ヒンタータ族はマラケシュの南、アトラス山中に住むベル系部族。一二世紀前半のムワッヒド朝建国に際しては、ハフス朝の名祖アブー・ハフス・ウマルをはじめ、ヒンタータ族が重要な役割を担った (*al-'Ibar*, vol. 6, pp. 223-224; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "Himaia").

(40) アブー・ハサンに対するクーデターを指す。註八参照。イフリーキヤからの帰途において難破したアブー・ハサンは、息子アブー・イナーンに対抗しながらスイジルマールサ、マラケシュを点々とした。最終的に、アトラス山中に入ってヒンタータ族にかくまわれ、一三五年に病没した (*al-'Ibar*, vol. 7, pp. 286-287)。

(41) Banū 'Abd al-Wad. ザイヤーン朝の別名。アブドゥルワードとはザナタ系ベル遊牧民の部族名で、ムワッヒド朝末期の政治的混乱の中で中央マグリブに勢力を広げた。その中には複数の有力家系があるが、最終的にザイヤーンの子ヤグムラーサンが王朝を築いたので、ザイヤーン朝とも呼ばれる。

(42) Abū Ishāq Ibrāhīm ibn Abī Yāyā Abī Bakr. ハフス朝第一八代君主アブー・イスハーク・イブラーヒーム二世 (在位一三三〇—一三三九年)。マリーン朝君主アブー・ハサンの撤退後、父王のハージブであったイブン・ターフラギーンに擁立され、まだ幼少だったにもかかわらず即位した。治世を通じて実権はイブン・ターフラギーンに握られたままであった (*al-'Ibar*, vol. 6, pp. 363ff; Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, pp. 128-129)。

(43) shaykh al-muwahhidin. ハフス朝下で大きな影響力を持っていたムワッヒドゥーン、すなわちイブン・トゥーマルトの宗教改革運動に従い、ムワッヒド朝建国の母体となった諸部族を統べる長。『歴史序説』によれば、官吏の任免および軍隊の指揮を担う初期ハフス朝最高の官職であった (Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, pp. 126-127; 『歴史序説』第二卷, 一三八頁)。ムワッヒドゥーンについては「イブン・ハルドゥーン自伝2」, 四五頁, 註一四も参照。

(44) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」, 五四頁, 註一三九参照。

(45) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」, 四九頁, 註六二参照。

(46) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」, 五一頁, 註九〇参照。

(47) Abū 'Abd Allāh Muḥammad ibn 'Abd al-Muḥaymin al-Haḍramī (一三二二年没)。当時セウタを治めていたアザフィー家と親しく、一二八四年以降、セウタのカーディーを務めた。 (al-Nubāhī (al-Bunnānī), *Ta rīkh quḍāt al-Andalus*, ed. E. Lévi-Provençal, Cairo, 1948, pp. 132-133)。

(48) アザフィー家はムワッヒド朝治下で代々セウタのカーディーを務めてきたウラマー名家。ムワッヒド朝末期の一三二〇年、カーディーであったアブー・カーシム・アザフィーが自立すると、一三〇六年にナスル朝に攻略されるまで約半世紀の間、世襲的にセウタを支配した (John Darek Latham, "The Rise of the 'Azafids of Ceuta," in *Israel Oriental Studies* 2, 1972, pp. 263-287; John Darek Latham, "The Later 'Azafids," *Revue de l'Occident musulman et de la Méditerranée* 15-16, 1973, pp. 109-125; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "'Azafī"; 「イブン・ハルドゥーン自伝2」, 四五頁, 註五)。

(49) Abū Ishāq Ibrāhīm al-Ghāfiqī (一三二七年没)。セウタのカーディーをつとめた法学者。セビーリヤの生まれで、一二四八年のキリスト教徒による征服を逃れてセウタに移住した。アラビア語文法学者としても知られていた (al-Nubāhī (al-Bunnānī), *Ta rīkh quḍāt al-Andalus*, pp. 133-134)。

(50) Abū Sa'īd Faraj ibn Ismā'īl ibn Yūsuf ibn Naṣr (一二四八—一三三〇年)。ナスル朝の王族でマラガの太守。後述のナスル朝によるセウタ攻略の主導者。セウタを追われた後もマラガに勢力を温存し、息子イスマーイールを擁してナスル朝君主ナスルに対抗したが、息子に幽閉されて没した (Ibn al-Khaṭīb, *al-ihāya fi akhbār Gharnāta*, ed. Muḥammad 'Abd Allāh 'Iṣṣān, Cairo: Maktabat al-Khanjī, 1973-78, vol. 4, pp. 241-246)。

(51) 一三〇六年、ナスル朝の王族アブー・サイードがセウタを占領し、アザフィー家を追放した事件。ジブラルタル海峡の制海権を独占しようとするこのナルス朝の動きは、周辺諸国の反感を買い、マリーン朝、カステイリヤ王国、アラゴン連合王国の三者が同盟を形成してナスル朝を包囲する事態に発展した。この結果、一三〇九年に、ナスル朝君主ムハンマド三世は廃位され、セウタもナスル朝の手から失われた (*al-'Ibar*, vol. 7, pp. 228-230; Harvey, *Islamic Spain 1250-1500*, pp. 168-170)。

(52) Ibn al-Zubayr, Abū Ja'far Ahmad (一一三〇—一三〇八年)。グラナダのハディース学者、クルアーン読誦学者。 (J. Liria Delgado ed., *Biblioteca de al-Andalus*, Almería: Fundación Ibn Tufayl, 2004, tomo 6, pp. 327-339; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "Ibn al-Zubayr, Abū Ja'far")。

(53) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」, 五三頁, 註一三四参照。

(54) al-sulṭān al-nakhlī. ナスル朝第三代君主ムハンマド三世 (在位一三〇二—

一三〇九年)のこと。註五一にあるようにセウタ攻略によって王朝の危機を招き、弟ナスル(在位一三〇九―一三二四年)によって廢位されたため、この呼び名が⁴⁶ (Ibn al-Khaṭīb, *al-Iḥiāʾ*, vol. 1, pp. 544-556; Harvey, *Islamic Spain 1250-1500*, pp. 168-170)。

- (55) Ibn al-Hakīm al-Rundī, Abū ‘Abd Allāh Muḥammad (一二二二―一三〇九年)。ロンダ生まれでグラナダで活躍した文人、政治家。詩文・散文にすぐれ、ナスル朝君主ムハンマド二世のもとで書記として登用された後、ムハンマド三世の治世にはワズィールに任じられた。その権勢から「二つのワズィール位を持つ者 (dhū al-wazīratayn)」と呼ばれたが、ムハンマド三世が廢位された一三〇九年の政変によって殺害された (Ibn al-Khaṭīb, *al-Iḥiāʾ*, vol. 2, pp. 444ff; J. Liriola Delgado ed., *Biblioteca de al-Andalus*, tomo 3, pp. 245-255)。

- (56) Ibn Rushayd al-Fihri, Abū ‘Abd Allāh Muḥammad (一二五九―一三二一年)。セウタ生まれのハディース学者、法学者。一二八四年から三年間にわたるメッカ巡礼と学問遍歴の旅の記録を残したため、「偉大な旅行家 (al-rāḥiyya)」と呼ばれる。この旅に同道したことからイブン・ハキーム・ルンディーと友誼を結び、その縁でグラナダの大モスクの説教師に任じられた。ナスル朝の政変でイブン・ハキームが殺害されると、マリーン朝に仕えフェズで没した (Ibn al-Khaṭīb, *al-Iḥiāʾ*, vol. 3, pp. 135-143; J. Liriola Delgado ed., *Biblioteca de al-Andalus*, tomo 3, pp. 504-515; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “Ibn Rushayd”)。

- (57) Abū al-‘Abbās Ahmad ibn ‘Abd Allāh ibn Muḥammad al-‘Azafī (一二三〇九年没)。セウタ生まれの詩人。セウタを支配したアザフィー家の出身。一三〇六年のナスル朝のセウタ攻略の際に、一族の者たちと共にグラナダに連行された。そこでイブン・ハキームの知遇を得てナスル朝に仕えたが、一三〇九年の政変によってイブン・ハキームが殺害されると軟禁状態におかれ、まもなく没した (Ibn al-Khaṭīb, *al-Iḥiāʾ*, vol. 1, pp. 278-284; J. Liriola Delgado ed., *Enciclopedia de al-Andalus. Diccionario de autores y obras andalusíes*, Granada: Fundación El Legado Andalusí, 2004, tomo 1, pp. 79-82)。なお校訂版の底本でありイブン・ハルドゥーン自筆とされるアヤソフィヤ写本では、この人物の父親の名が記されるべき箇所が空白になっており、校訂者イブン・ターウィートは生前のイブン・ハルドゥーンがいずれ名前を埋めるつもりで空白のままにしていたのであろうと推測している。

- (58) Ibn Khamīs al-Tijmāsī, Abū ‘Abd Allāh Muḥammad (一二五二―一三〇九年)。トレムセン生まれの詩人。清貧なスーフィーとしても知られる。マリーン朝君主アブー・ヤアクーブによるトレムセン包囲に際して生地を離れ、各地を転々とした後、グラナダに移った。イブン・ハキームの知遇を得て詩人として厚遇されるが、一三〇九年にイブン・ハキームが殺害された際に彼も殺された (Ibn al-

Khaṭīb, *al-Iḥiāʾ*, vol. 2, pp. 528-562; Yahyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-rūwād*, pp. 109-112; J. Liriola Delgado ed., *Biblioteca de al-Andalus*, tomo 3, pp. 616-621; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “Ibn Khamīs”)。

- (59) Lisān al-Dīn Ibn al-Khaṭīb, Abū ‘Abd Allāh Muḥammad (一二三三―一三七四年)。ナスル朝に仕えた文人、政治家。詩文・散文に優れ、また法学、スーフィズム、哲学など多岐にわたる著作を六〇点以上残した。ナスル朝君主ユースフ一世のもとで書記として登用された後、ワズィールにまで任じられた。その子ムハンマド五世からも重く用いられ「二つのワズィール位を持つ者 (dhū al-wazīratayn)」と呼ばれるほどの影響力を有した。しかし、晩年はムハンマド五世との関係が悪化し、フェズに亡命。最終的にはムハンマド五世の圧力を受けたマリーン朝により獄中で殺害された (Ibn al-Khaṭīb, *al-Iḥiāʾ*, vol. 4, pp. 438ff; J. Liriola Delgado ed., *Biblioteca de al-Andalus*, tomo 3, pp. 643-698; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “Ibn al-Khaṭīb”)。イブン・ハルドゥーンとの間には、アンダルスに渡った彼と親交を結んだり、逆に疎遠になったりと浅からぬ縁があり、『自伝』の中でも往復書簡が引用されるなど、たびたび登場する (cf. *al-Taʾrīf*, pp. 79ff)。ここで言及されている『グラナダ史 (Taʾrīkh Gharnāṭa)』は、『グラナダの話についての包括 (al-Iḥiāʾ fi akhbār Gharnāṭa)』のことで、グラナダの地理・歴史・人物についての百科全書的な著作である。

- (60) 一三〇九年、グラナダで政変が起こり、ワズィールであったイブン・ハキームが殺害されるとともに、ムハンマド三世が廢位され、代わってナスルが即位した。また、セウタでは反ナスル朝の暴動が生じ、それに乗じてマリーン朝軍がセウタに入城した (*al-Ṭhar*, vol. 7, pp. 239-240)。註五一も参照。

- (61) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」五二頁、註一〇七参照。

- (62) Abū ‘Alī ‘Umar ibn Abī Saʿīd ‘Uthmān (一二三二―一三三三年没)。マリーン朝君主アブー・サイードの第二子。兄のアブー・ハサン・アリーよりも父に気に入られていたため、事実上の支配者として振る舞っていたという。父の留守をついて一二四一五年に反乱を起こすが、病に陥つたため諸將に離反され、翌年、スィジルマールサを与えられてフェズを退去した。その後も、サハラ方面の実質的な支配者として君臨し続け、一時的にマラケシュを奪うことすらあった。アブー・ハサンの治世になるとザイヤーン朝と結んで再び王位をねらうが敗北し、捕らえられて処刑された (*al-Ṭhar*, vol. 7, pp. 243-245, 253-254)。

- (63) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」五二頁、註一〇八参照。

- (64) Sijilmāsa. 現在のモロッコの南東、サハラ砂漠の北縁、ズィーズ川流域のオアシスに位置する都市。サハラ交易で繁栄した (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “Sijilmāsa”)。

- (65) Abū al-Faḍl Muḥammad ibn ‘Abd Allāh ibn Abī Maḍyan al-‘Uhmānī (生没年不詳)。マリーン朝君主アブー・ハサンに仕えた書記。マムルーク朝やハフス朝などに対する外交使節としても活躍した (*al-‘Ibar*, vol. 7, pp. 265, 267)。ライースと呼ばれる彼の父アブドゥッラーは、一三世紀後半のアブー・ユースフ・ヤアクーブから、一四世紀初頭のアブー・ラビーウの治世まで初期マリーン朝四代の君主に仕えた書記で、ハージブもつとめた。アブー・マドヤン家には文才に優れた人物が多く、この他にも多くの書記や詩人が輩出している。cf. Ibn al-Aḥmar, *Rawḍat al-nisrīn fī dawlat Bani Marīn*, ed. ‘Abd al-Wahhāb ibn Maṣṣūr, Rabat: al-Maṭba‘a al-Malakīya, 1991, pp. 28, 31-36, 39, 46, 48-49; Ibn al-Aḥmar, *Nahḍ al-jumhūr (al-‘Ibar al-Maghrib wa al-Andalus)*, Beirut: Mu‘assasat al-Risāla, 1987, pp. 255-268.
- (66) cf. Ibn al-Khaṭīb, *al-Iḥāṭa*, vol. 4, pp. 11-18.
- (67) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」五二頁、註一〇九参照。
- (68) Khaṭīb, 主に金曜日の集団礼拝の際に、説教をおこなう役職。彼の場合には、常にスルターンと礼拝を共にして、説教をおこなっていたのであろう。
- (69) Ibn Abī Yahyā, Abū Ishāq Ibrāhīm ibn ‘Abd al-Rahmān ibn Abī Bakr al-Tasūf al-Tāzī (一三九九年没)。マリク派の法学者で、イブン・ハティープの師匠の一人。アブー・ハサン・スガイル達に師事し、サフヌーンの『編纂』やイブン・アビー・ザイドの『書簡 al-Risāla』など、マリク派法学の主要著作の注釈書を執筆した (Ibn al-Khaṭīb, *al-Iḥāṭa*, vol. 1, pp. 372-373; al-Nubāḥī (al-Bunnān), *Ta’rīkh quḍāt al-Andalus*, p. 136)。
- (70) cf. *al-‘Ibar*, vol. 7, p. 284
- (71) Abū al-Faḍl Muḥammad ibn Abī al-Ḥasan ‘Alī (一三五六年没)。この中で述べられているように、マリーン朝君主アブー・ハサンのチュニス撤退に際してチュニスを委ねられるが、ハフス朝軍の進軍により自らもすぐに撤退を余儀なくされた。兄弟のアブー・イナーンがマリーン朝を支配するとグラナダに追放され、しばらくナスル朝君主ユースフ一世のもとに身を寄せた。やがてカステイリヤ海軍の助けをえて現在のモロッコ南部に上陸しアトラス山脈に拠るが、捕らえられて処刑された (*al-‘Ibar*, vol. 6, p. 363, vol. 7, pp. 293-294)。息子にマリーン朝君主のワースイク (在位一三八六～一三八七年) がいる。
- (72) Abū al-‘Abbās al-Faḍl ibn Abī Yahyā Abī Bakr. ハフス朝第一四代君主アブー・アッバース・ファドル (在位一三五〇年)。アブー・ハサンの撤退後、チュニスに入城して即位するが、すぐに父アブー・ヤフヤー・アブー・バクル二世のハージブだったイブン・ターフラーギーンに追われて殺された (*al-‘Ibar*, vol. 6, pp. 361-364)。なお、ここで「ムワッヒドゥーン」とあるのはハフス朝のことを指している (イブン・ハルドゥーン自伝2「四五頁、註一四参照」)。
- (73) ‘Amr ibn Muḥammad ibn ‘Alī. アブー・ハサンのイフリーキヤ遠征に従い、チュニスで警察業務を担った。アブー・ハサンのチュニス撤退に際しては、ここに記されているようにスルターンの家族を保護してアンダルスに渡った。アブー・ハサンの死後、アブー・イナーンの求めに応じてマグリブに帰還して重用され、ヒンター族からの徴税を委ねられた。父やおじも同様の任についており、ヒンター族の中でも有力家系であったと思われる。アブー・イナーンが息子ムハンマド・ムウタミドをマラケシュ太守に任じた際には、その補佐役を任され、アブー・イナーン死後の政情混乱の中でも彼を擁してアトラス山脈からマラケシュにかけての地域に割拠した (*al-‘Ibar*, vol. 7, pp. 300-301)。
- (74) Abū al-Ḥajjāj Yūsuf ibn Ismā‘īl ibn Abī Sa‘īd Faraj. ナスル朝第七代君主ユースフ一世 (在位一三三三～一三五四年)。一三四〇年のタリーファの戦いでマリーン朝と共にキリスト教徒と戦い敗北を喫する。しかし、まもなくして黒死病の流行によりカステイリヤ王国が混乱に陥ったため、キリスト教徒からの軍事的圧力は減じた。この結果、彼と息子ムハンマド五世の時代に、ナスル朝は繁栄の時代を迎えた。アルハンブラの主要部分が建設されたのもこの時代である (Ibn al-Khaṭīb, *al-Iḥāṭa*, vol. 4, pp. 318-339; Harvey, *Islamic Spain 1250-1500*, pp. 190-205)。
- (75) Abū ‘Abd Allāh Muḥammad ibn Muḥammad ibn Aḥmad ibn ‘Alī ibn Abī ‘Amr al-Tamīmī (一三五五年没)。マリーン朝君主アブー・イナーンのハージブ。イフリーキヤ地方の知識人名家の出自。父ムハンマドはチュニスからトレムセンに移り住み、マリーン朝君主アブー・ハサンの信頼を得て王子アブー・イナーンの養育係を任された。このため、その子のムハンマド・イブン・アビー・アムルもアブー・イナーンとともに育てられた。アブー・イナーンが即位すると、ムハンマド・イブン・アビー・アムルはハージブに任じられ、マリーン朝宮廷において絶大な影響力を誇った。しかし、まもなくしてスルターンと疎遠になり、ハフス朝との最前線に位置するビジャーヤに派遣されてそのまま任地で没した。遺体はアブー・イナーンの命により父の眠るトレムセン郊外のウッバードに運ばれ埋葬された (*al-‘Ibar*, vol. 7, pp. 291-293; Yahyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-nawwād*, pp. 131-132)。
- (76) Qusanfina. 現在のアルジェリア東部、アトラス山脈中に位置する都市。地名は、西暦三二三年にローマ皇帝コンスタンティヌス一世が町を再建したことに由来する。ハフス朝期には、地中海岸の都市ビジャーヤとともにたびたび王族達が割拠して拠点とした (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “Qusanfina”)。
- (77) ‘Alama. 公文書に効力を与えるために、神を称える決まり文句などを記すこと。ここにあるように君主が自ら記さずに、書記の手で記されることも多かった。後にイブン・ハルドゥーン自身もこの役目を与えられる (*al-Ta’rīf*, p. 55; 『歴史序説』第二巻、一五二～一五七頁, *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “Alama”)。

- (78) Muhammad ibn Abī al-Qasim ibn Abī Madyan al-Uḥmānī (生没年不詳)。アブー・イナーンに仕えた書記。註六五のアブー・ファドルの従兄弟にあたる (Ibn al-Aṣṣam, *Rawḍat al-nisrīn*, p. 39)。
- (79) *ṭawqī*。提訴された請願に対して支配者が与えた裁決を書類として書き留め、形式を整えること (『歴史序説』第二巻、一五三頁; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “*Tawqī*”)。
- (80) Ibn al-Hajj, Abū Ishāq Ibrāhīm ibn ‘Abd Allāh al-Numayrī al-Gharnāfī (一三三三—一三八三年頃)。グラナダ生まれの学者にして詩人。メッカ巡礼と学問修行を志して二度にわたって東方に旅をおこなった。ビジャヤ、コンスタンティヌス、フェズなど各地でハフス朝やマリーン朝の支配者に書記やカーディーとして仕えた。アブー・イナーンに仕えていたこの時期には、彼のイフリーキヤ遠征を記録した『波濤 *Fayḍ al-‘ubūd*』を著している。アブー・イナーンの死後はグラナダに戻り、ナスル朝に仕えてマグリブへの外交使節などに任じられた (Ibn al-Khaṭīb, *al-Iḥāṭa*, vol. 1, pp. 342-363; J. Lirio de Delgado ed., *Biblioteca de al-Andalus*, tomo 3, pp. 341-351; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “Ibn al-Hāǧǧī”)。
- (81) Abū Salīm Ibrāhīm ibn Abī al-Ḥasan ‘Alī, マリーン朝第一五代君主アブー・サリム・イブラーヒーム (在位一二五九—一三六一年)。兄アブー・イナーンに追放されてアンダルスに亡命していたが、アブー・イナーン死後の混乱の中、マグリブに帰還して挙兵し王位をえた。この企てには、イブン・ハルドゥーン自身も協力しており、自伝中にも詳細な記述がある (*al-Ta’rīf*, pp. 68-70; *al-Iḥāṭa*, vol. 7, pp. 304-306)。
- (82) Abū al-Ḥasan ‘Alī ibn Muhammad ibn Ahmad ibn Musā ibn Su‘ūd al-Khuzā‘ī (一二一〇—一三八七年)。法学者にして文学者、文法学者。イブン・スウード家は元々は著名なアンダルスの知識人家系であるが、彼の父がトレムセンに移住し、彼自身は同地で生まれた。ザイヤーン朝で書記を務めた後、フェズに移りアブー・イナーンをはじめ歴代のマリーン朝君主に仕えた (Ibn al-Aṣṣam, *Nahṭ al-jumūn*, pp. 249-250; Khayr al-Dīn al-Zirikī, *al-‘Iṭm: Qānūn tarīqīm li-ḥashar al-rīṭāl wa al-nisā’ min al-‘Arb wa al-musta’rībīn wa mustashriqīn*, 8 vols., Beirut: Dār al-‘Ilm al-Malā’īn, 1989, vol. 5, pp. 6-7)。
- (83) ‘Umar ibn ‘Abd Allāh ibn ‘Alī ibn Sa‘īd al-Yabānī (一二六七年没)。マリーン朝のフズィールで、父アブドゥッラーもアブー・イナーンに仕えてイフリーキヤ遠征で活躍した。その子ウマルはアブー・サリムに仕えたが、一三六一年に叛旗を翻して後、次々と自らの傀儡となる君主を即位させてマリーン朝の実権を握った。しかし、一三六七年、三人目に擁立したアブー・ファリスにより殺害される。イブン・ハルドゥーンとも当初は協力関係にあったが、やがて疎遠となり、イブン・ハルドゥーンのアンダルス移住のきっかけとなった (*al-Ta’rīf*, p. 70; *al-Iḥāṭa*, vol. 7, pp. 312ff; al-Zirikī, *al-‘Iṭm*, vol. 5, p. 52)。
- (84) Abū Fāris ‘Abd al-‘Azīz ibn Abī al-Ḥasan ‘Alī, マリーン朝第一八代君主アブー・ファリス・アブドゥルアズィーズ (在位一二六六—一二七二年)。ワズィールのウマル・イブン・アブドゥッラーに擁立されたが、即位の翌年、その専横をきらって彼を殺害して実権を掌握した。国内の反乱を鎮圧し、トレムセンを征服するとともに、亡命してきたイブン・ハティープを保護してナスル朝の介入を退けるなど、一時的にマリーン朝の勢威を取り戻した。当時ビスクラに寄寓していたイブン・ハルドゥーンも近辺のアラブ遊牧民の協力を得ながら、彼の中央マグリブ経営に協力している (*al-Ta’rīf*, pp. 135-138; *al-Iḥāṭa*, vol. 7, pp. 322-336; Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, pp. 113-114)。
- (85) Abū Zaynān Muhammad al-Sa‘īd ibn Abī Fāris ‘Abd al-‘Azīz, マリーン朝第一九代君主サイード二世 (在位一二七二—一二七四年)。父の後を継いで即位するが、ナスル朝と対立し、ナスル朝の支援を受けた従兄弟アブー・アッバース・アフマドに王位を奪われた (*al-Iḥāṭa*, vol. 7, pp. 336-340)。
- (86) Abū Bakr ibn Ghāzī ibn Yahyā ibn Idrīs ibn ‘Abd Allāh ibn al-Kas al-Majdūf (一二七七八年没)。アブー・ファリスとサイード二世のワズィール。彼の父ガーズィーもアブー・ハサンのワズィールをつとめていた。サイード二世の擁立に関与し、実権を握った。フェズに亡命していたイブン・ハティープの引き渡しを拒んだことからナスル朝との関係が悪化し、マリーン朝に対するナスル朝の介入を招いた。アブー・アッバースの即位後、マヨルカ島への亡命を経て、一旦は帰参するが、再び反抗して殺された。イブン・ハルドゥーンとも縁があり、アブー・バクルがアブー・ファリスの命でザイヤーン朝の残党を掃討した際に協力している (*al-Ta’rīf*, pp. 135-139, 218; *al-Iḥāṭa*, vol. 7, pp. 336-340, 343-344, 351)。
- (87) Abū al-‘Abbās Ahmad ibn Abī Salīm Ibrāhīm, マリーン朝第二〇代君主アブー・アッバース・アフマド (在位一二七四—一三八四、一三八七—一三九三年)。タンジールに他の王族たちと共に軟禁されていたが、ナスル朝の支援を得て解放され、王位を獲得した。即位後まもなくしてナスル朝側の要請により、フェズに亡命していたイブン・ハティープを投獄し、殺害した (*al-Iḥāṭa*, vol. 7, pp. 338ff)。
- (88) Muhammad ibn ‘Uthmān ibn Raḥmū ibn ‘Alī ibn ‘Abd Allāh ibn al-Kas al-Majdūf (一二八四年没)。上記のアブー・バクルとは同族のカーサ家の出身。アブー・バクルへの対抗心からナスル朝を通じてアブー・アッバースをタンジールから解放し、その王位獲得に協力した。その後ワズィールとなってマリーン朝の実権を握るが、アブー・アッバースが廃位された際に殺された。イブン・ハルドゥーンとはアブー・サリムの王位奪取以来の知己だったが、アブー・アッバースを王位

につけた一三七四年にイブン・ハルドゥーンに嫌疑をかけて一時投獄し、彼の二度目のアンダルス行きのおかげを作った (*al-Ta'rif*, pp. 69, 219, 224-225; *al-Ibar*, vol. 7, pp. 338-341, 351-352)。

- (89) アヤンフィヤ写本では、没年が空白となっている。また、ブーラク版では没年の言及そのものがない (*al-Ibar*, vol. 7, p. 394)。なお、イブン・リドゥーンの没年自体は一三八一年。

- (90) 'Abd al-Rahmān ibn Abī Ifallūsan 'Alī ibn Abī 'Alī 'Umar (一三八二年没)。マリーン家の王族。彼の家系は祖父アブー・アリー (註六二参照) の代からサハラ交易の拠点であるスィジルマールに勢力を有し、たびたびフェズ王に反抗していた。彼自身は反乱に敗れてグラナダのナスル朝に身を寄せていたが、一三七三年、ナスル朝の支援を受けてマグリブに送り込まれた。翌年、同じくナスル朝の支援を受けたアブー・アッバースがフェズの支配権を握ると、王国を南北に分割することで両者の間に妥協が成立し、アブドゥッラフマーンはマラケシュを拠点に現モロッコの南部を支配した。最終的には再び両者は対立し、アブドゥッラフマーンが敗北して殺害された。イブン・ハルドゥーンがアブー・アッバースに投獄された際には、これを釈放させたことがある (*al-Ta'rif*, pp. 224-225; *al-Ibar*, vol. 7, pp. 337-341, 344-347; Miguel Ángel Manzano Rodríguez, *La intervención de los Benimerines en la península ibérica*, Madrid: CSIC, 1992, pp. 362-366)。

- (91) Azammūr. 現モロッコの大西洋岸にある都市。ウナム・ラビーウ川の河口左岸に位置する (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "Azammūr")。ただし、イブン・リドゥーンが没した地については、アンファー (現カサブランカ) とする史料も多い (ex. Ibn al-Qāḍī, *Jadhwat al-iqibās*, p. 437)。

- (92) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」, 四一頁以降、(二)までがイブン・リドゥーンを讃えたラハウイーの頌詩とその注解を述べている。この後、イブン・ハルドゥーンの少年時代にイフリーキヤに到来したマグリブの知識人たちの列伝へと話が戻る。

- (93) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」, 五一頁、註九四参照。

- (94) *mazamīr* 'Al Dawūd. ミズマール (*mizmar*, 複数形 *mazamir*) は、オーボエに似た木管楽器の総称。単管が複管か、リードを用いるか否か等により様々な種類がある (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "Mizmar")。校訂者イブン・ターウィートが述べるように、「*mizmar*」は、ハディースに由来する表現。預言者ムハンマドは、クルアーンを朗誦しているアブー・ムーサー・アシュアリーの美声をほめる際に、「*ダヴィデ家のミズマールになぞらえたという*」(牧野信也訳『ハディース イスラーム伝承集成』中央公論新社(中公文庫)、二〇〇一年、第四卷、五六六頁)。

- (95) *tarāwih*. ラマダーン月の晩の礼拝(イシャー礼拝)後に行なう特別な自発的礼拝。

ラマダーン月中続けられる (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "Tarāwih"; 「タラーウィーフ礼拝」『岩波イスラーム辞典』)。

- (96) *hizb*. クルアーンの全章句を六〇分割したもの。特に上述のタラーウィーフ礼拝のさいに朗誦する (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "Hizb"; 「ジュスウ」『岩波イスラーム辞典』)。

- (97) *Miknāsa*. 現モロッコの中部平原に位置する都市。その名はザナータ系ベルベルのミクナース族に由来する (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "Miknāsa")。

- (98) Abū 'Abd Allāh Muḥammad ibn Muḥammad ibn al-Sabbāgh (一三四九年没)。マリク派法学者。ハディース学者 (Ibn Ghāzī, *al-Rawḍ al-hāṭin fī akhbār Miknāsa al-zayyūn*, Rabat: al-Matba'a al-Malakīya, 1988, pp. 42-44; Ibn al-Qāḍī, *Jadhwat al-iqibās*, p. 301)。

- (99) Abū 'Abd Allāh Muḥammad ibn 'Abd Allāh ibn 'Abd al-Nūr (一三四八―九年没)。マリク派法学者。フェズやマリーン朝支配下のトレムセンにおいてカーディーをつとめた。イブン・マルズークによれば、彼はアラビア語だけでなくザナータ系ベルベルの言葉にも通じていたため、マリーン族はじめザナータ系諸部族に非常に人気があったという。サンハージャ系ベルベルという彼の出自とも関連があるのかも知れない (Yalyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-rūwād*, pp. 121-122; Ibn Marzūq, *al-Mustad al-salīh al-ḥasan fī ma'āthir wa mahāsin mawlā-nā Abī al-Ḥasan*, ed. Maria Jesús Viguera, Algiers: Bibliothèque Nationale d'Algérie, 1981, p. 267; Ibn al-Qāḍī, *Jadhwat al-iqibās*, pp. 301-302)。

- (100) *Nadrūna*. トレムセンの北西、地中海に近い丘陵地帯に位置する都市。この当時はザイヤーン朝の支配下にあった (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "Nadrūna")。
- (101) *Sanhāja*. ザナータ、マスムーダと並ぶベルベル諸部族の系統のひとつ。過去には、イフリーキヤ西部から勃興したファティマ朝、サハラ砂漠西部から勃興したムラービト朝などの王朝の母体となった。イブン・ハルドゥーンは、自分の時代のサンハージャ系諸部族の居住地として、いずれも現モロッコに位置する、ターザ周辺、アトラス北麓のタードラー地方、地中海沿岸のリーフ山地、大西洋沿岸のドゥッカラ地方などを挙げている (*al-Ibar*, vol. 6, pp. 205-206; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "Sanhāja")。

- (102) Abū al-Ḥasan 'Alī ibn 'Abd al-Nūr. 兄弟ムハンマドに代わってトレムセンのカーディー職についた他、マグリブ各地のカーディーをつとめた (Yalyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-rūwād*, p. 122)。

- (103) cf. *al-Ibar*, vol. 7, pp. 312-314.

- (104) *tawāf al-quḍm*. メッカの聖モスク内にあるカーバ神殿の周りを左方向に七回まわる儀式のこと。メッカ巡礼のさいには、メッカに到来した日およびメッカを去る

前にタワーフを行うことになっている(「タワーフ」『岩波イスラーム辞典』)。

- (105) *anṭr al-hajj*: メッカ巡礼を安全に挙行できるよう権力者から任命され、巡礼団の護衛部隊を指揮する役職。マグリブ方面からの巡礼はエジプトに集結してそこで組織される巡礼団に加わるが、この当時のエジプトからの巡礼団のアミールはマムルーク朝スルターンによって任命されていた(佐藤次高『イスラームの国家と王権』岩波書店、二〇〇四年、一八四―一八七頁)。

- (106) Sayf al-Dīn Yabbughā ibn ‘Abd Allāh al-Khassāk al-Nāsir (一三六七年没)。マムルーク朝の第二二二四代君主ハサン(在位一三四七―一三五〇、一三五四―一三六一年)のマムルーク出身。主人ハサンを殺害し、ムハンマド(在位一三六一―一三六三年)を即位させ、自らはアターベクに就任した。さらにシヤアバーン二世(在位一三六三―一三七七年)を新たに擁立し政治的実権を握るが、一三六七年に部下により殺害された(Ibn Hajar al-‘Asqalānī, *al-Durar al-kāminā fī a’yān al-mi’a al-hāmina*, 5 vols., ed. M. Sayyid Jād al-Haq, Cairo, 1966, vol. 5, pp. 213-215)。

- (107) *kimyā*: 卑金属を貴金属に変換することをめぐる学問。アラビア語の *kimyā* は、英語の *chemistry* をはじめとする近代化学を意味する西欧諸語の語源でもある。一方で、ここで述べられているように錬金術にはいかがい学問と見なされる側面もあり、イブン・ハルドゥーン自身も錬金術批判を展開している(『歴史序説』第四巻、一二一三六、六三―八〇頁; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “al-kimyā”。

- (108) イル・ハーン朝が崩壊した後、モンゴル系のジャラーイル朝がバグダード一帯を支配していた。この事件当時の君主は、シャイフ・ウヴァイス(在位一三五六―一三七四年)、フサイーン一世(在位一三七四―一三八二年)、アフマド(在位一三八二―一四一〇年)の何れかと考えられる(C. E. Bosworth, *The New Islamic Dynasties: A Chronological and Genealogical Manual*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 1996, pp. 267-268)。

- (109) *Mārdn*: ティグリス・ユーフラテス両河間の上流域ジャズイーラ地方にある町。現トルコ領。この当時はアルトゥク朝がマルディン一帯を支配していた。本編に登場する君主は、ダーウード二世(在位一三六八―一三七六年)カイサー(在位一三七六―一四〇七年)のどちらかと考えられる(*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “Mārdn”; C. E. Bosworth, *The New Islamic Dynasties*, pp. 194-96)。

- (110) Abū ‘Abd Allāh Muḥammad ibn Yāhyā ibn ‘Alī ibn al-Najjār (一三四八―九九年没)。数学者、天文学者(Yāhyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-rūwād*, p. 119; Ibn al-Qaṭī, *Jadhwa al-iqṭibās*, p. 302)。

- (111) *al-Majisī fī al-hay’a*: 二世紀後半にプトレマイオス・クラウディオスが著したギリシア語による数理天文学の書 *Synaxis Astronomica*。通称『アルマゲスト』のアラ

ビア語訳。イスラーム圏の天文学においても非常に重要視された。書名中の *magis* は強勢音ではなく *al-Majisī* と表記するのが一般的(『歴史序説』第三巻、三五九頁: 「アルマゲスト」『岩波イスラーム辞典』)。

- (112) Abū ‘Abd Allāh Muḥammad ibn Hīlāl. 不詳。

- (113) Abū Tashfīn ‘Abd al-Rahmān ibn Abī Hammū Mūsā. サイヤーン朝第五代君主アブ・ターシュフィーン一世(在位一二一八―一二三七年)。父アブ・ハンム一世を殺害して即位。マリーン朝のアブ・ハサンによってトレムセンを征服され、殺された(Yāhyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-rūwād*, pp. 215-219; *al-Jbar*, vol. 7, pp. 104-111)。

- (114) Abū al-‘Abbās Ahmad ibn Shu‘ayb al-Jaznā‘ī al-Tazī (一三四九年没)。医学とアラビア語に秀でたフェズ出身の文人。哲学、天文学、錬金術にも通じていた。ジャズナーという名は現モロッコ北部のリーフ山地のベルベル系部族名に由来する(Ibn al-Khaṭīb, *al-Iltiṭā*, vol. 1, pp. 272-277; Ibn al-Qaṭī, *Jadhwa al-iqṭibās*, pp. 119-121; J. Lirioa Delgado ed., *Biblioteca de al-Andalus*, tomo 5, pp. 383-386)。

- (115) *bān*: アラビア半島に見られる落葉高木。和名ワサビノキ。細くしなやかなその姿から、詩の中ではほっそりとした長身の女性の比喩として用いられる(*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “bān”; E. W. Lane, *Arabic-English Lexicon*, London, 1877, p. 278)。

- (116) *rand*: 月桂樹もしくはミルテ(銀梅花)を指す。いずれも芳香を持つ樹木である(Lane, *Arabic-English Lexicon*, p. 1165)。

- (117) Ibn Marzūq, Shams al-Dīn Abū ‘Abd Allāh Muḥammad ibn Ahmad ibn Muḥammad ibn Muḥammad ibn Abī Bakr ibn al-Hajj al-‘Ajīf al-Tiḥsānī (一一三〇―一三七九年)。トレムセン生まれの文人、ハディース学者。説教師をつとめたために「説教師(*al-khaṭīb*)」と、また、孫にあたる同名の文人と区別するために「祖父(*al-jadd*)」と呼ばれる。ここに記されているように、マリーン朝、ハフス朝など各地の宮廷を点々としつつ、知識人として重用された。マリーン朝君主アブ・ハサン称賛の書である『わが主君アブ・ハサンの事績と美德についての真正なムスナド(*al-Musnad al-sahīḥ al-ḥasan fī ma‘āthir wa mahāsīn muwla-nā Abī al-Ḥasan*)』などの著作がある。イブン・ハルドゥーンとは、マリーン朝君主アブ・サリムの王位奪取の際に協力し合ったが、その後、イブン・マルブークがアブ・サリムの寵を独占したため、疎遠となった(*al-Ta’rīf*, pp. 68-70, 76-77; Ibn al-Khaṭīb, *al-Iltiṭā*, vol. 1, pp. 103-130; Yāhyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-rūwād*, p. 115; Ibn Marzūq, *al-Musnad al-sahīḥ al-ḥasan*, pp. 19-53; J. Lirioa Delgado ed., *Biblioteca de al-Andalus*, tomo 4, pp. 124-137; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “Ibn Marzūq”)。

- (118) Abū Maḍyan Shu‘ayb ibn al-Ḥusayn al-Andalusī (一一二六―一九七七年)。スーフィ

ズム勃興期のマグリブの最も代表的なスーフィーであり、また多くの奇跡譚で知られる聖者。セビーリヤ近郊の小さな町で生まれ、フェズでスーフィズムの道に入った。メッカ巡礼を果たした後、北アフリカに戻りビジャーヤを拠点に活動した。ムワッヒド朝カリフに召喚されてマラケシュへ向かう途上にトレムセンで死亡し、ウッバードに埋葬された (Yahyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-rnwād*, pp. 125-126; Vincent J. Cornell, *The Way of Abū Maḍyan. The Works of Abū Maḍyan Shu'ayb*, Cambridge: The Islamic Texts Society, 1996; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "Abū Maḍyan"; 私市正年『マグリブ中世社会とイスラーム聖者崇拜』山川出版社、二〇〇九年、九二―九八頁)。彼の墓廟があるウッバードについては註二〇参照。

- (119) Abū Bakr ibn Marzūq. 実際には、() の主題であるムハンマド・イブン・マルズークからは四代前の先祖(曾々祖父)にあたる。一一世紀末、アブー・バクルの父のマルズークがトレムセンに移住して来たことされる。アブー・バクル自身は、イブン・ハルドゥーンが記すようにトレムセンに立ち寄った晩年のアブー・マドヤンに熱心に仕え、その墓廟を守るようになった。なお、ここで紹介されているアブー・バクルの埋葬のエピソードは、ザイヤーン朝君主ヤクムラーサンの時代なので、彼の孫ムハンマド Abū 'Abd Allāh Muḥammad ibn Muḥammad ibn Abī Bakr ibn Marzūq (一二八二年没) に関するものと考えざるべきであろう。マルズーク家については、以下を参照。Yahyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-rnwād*, pp. 114-115; Ibn Marzūq, *al-Musnad al-sahīh al-ḥasan*, pp. 15-19; 私市正年「トレムセンにおける三つの名門ウラーマ家 ―マッカーリー家、マルズーク家、ウクバーニー家― 護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社、一九八三年、五七五―五九九頁。

- (120) walāya. 神に近しく、神の友であることを表すスーフィズムの術語。神に近しく特別の恩寵を受けることは、奇跡を現出するきっかけとなり、それゆえに「神の友 (walī)」はある種の「聖者」的な存在と見なされる。

- (121) Abū al-'Abbās Ahmad ibn Muḥammad ibn Marzūq (一二八二―一三四一年) にあたる。一二七七年に息子とともにメッカ巡礼へと出発し、そのままメディナに住み着いて最後はメッカで没した。彼の師匠達としては、アブー・ハサン・スガイイル、アブドウルムハイミン、イブン・イマーム兄弟、イブン・アビー・アムル等の名が挙げられている。自分の一族とマリーン朝との縁の深さを強調するイブン・マルズークの著作によれば、父アフマドの婚礼には、当時トレムセンを包囲中だったマリーン朝君主アブー・サイードが立ち会ったという。また、アブー・ハサンによるトレムセン征服が間近であることを知った父アフマドは、息子イブン・マルズークに対してマグリブに戻るよう命じたという (Ibn Marzūq, *al-Musnad al-sahīh al-ḥasan*, p. 480; Yahyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-rnwād*, p. 115)。

- (122) jawāra. 原義は、「隣人となる」ことだが、特に神の隣人としてその保護を受けてメッカ・メディナなどの聖域に滞在し、信仰に明け暮れる生活を送ること (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "Muḍāwir"; 長谷部史彦「マムルーク朝期メディナにおける王権・宦官・ムジャーウィル」今谷明編『王権と都市』思文閣出版、二〇〇八年、二〇九―二四五頁)。

- (123) Burhān al-Dīn al-Safāqūṣī al-Mālikī, Abū Ishāq Ibrāhīm ibn Muḥammad ibn Ibrāhīm al-Qayṣī (一二九八?―一三四二?年)。マリーク派の法学者。ヒジャーヤで法学の教育を受け、メッカ巡礼の途上でエジプト・シリアのウラマーからも学んだ。著作には、兄弟のシャムスッディーン・ムハンマドと共同執筆した文法学の書 *Ṭarīb al-Qur'ān* 等がある (Ahmad Bābā al-Tinbuktī, *Nayl al-ibrahīm bi-tarīz al-Dībāq*, Cairo: Maktabat al-Thaqāfa al-Dīniya, 2004, pp. 26-29)。

- (124) 詳細不明。ただし、イブン・ハルドゥーン自身による書道や書体に関する説明として、以下の記述がある。『歴史序説』第三巻、九一一―〇九頁。

- (125) Abū 'Abd Allāh Muḥammad ibn Muḥammad ibn Muḥammad ibn Abī Bakr ibn Marzūq (一二四六年以降没)。マルズーク家の一員として、ウッバードにあるアブー・マドヤン廟の管理をしていた。アブー・ハサンがアブー・マドヤン廟の向かいにモスクを建設した際に、その差配をおこない、完成したモスクの説教師となった。なお、イブン・マルズーク自身の記述では、おじからの説教師継承の経緯はこのイブン・ハルドゥーンの説明と若干異なっている。それによれば、イブン・マルズークは、マグリブへ帰る途上、彼のおじとアブー・ハサンの双方から説教師職任命の知らせを受け取ったという。おじのムハンマドは、ハフス朝君主アブー・ヤフヤー二世の死の知らせがトレムセンに届いた際にも(一二四六年)、まだ存命だった (Ibn Marzūq, *al-Musnad al-sahīh al-ḥasan*, pp. 356, 403-404, 480-482)。
- (126) Abū 'Umar Tāshfīn ibn Abī al-Ḥasan 'Alī. 後のマリーン朝君主アブー・ウマル・ターシュフィーン(在位一二三六―一三二一年)。カステイリヤ側の史料でも Abū 'Umar として、タリーファの戦いの捕虜の中に数えられている (Manzano Rodríguez, *La intervención de los Benimerines*, p. 264)。後にマリーン朝君主アブー・サリムに対するクーデターによって擁立されるが、すでに精神に異常をきたしていたため支持を集めることができず、すぐに廃位された (*al-Iḥṣān*, vol. 7, pp. 313-314, 317)。
- (127) 当時のカステイリヤ王はアルフォンソ一世(在位一二二―一二三三〇年)。一二四〇年のタリーファの戦い(サラード川の戦い)と一二四四年のアルヘシラス征服によって、マリーン朝のイベリア半島介入を退けることに成功するが、ジブラルタル包囲中に黒死病により没した。イブン・アルフォンソという表現については、「イブン・ハルドゥーン自伝」、五三―五四頁、註四参照。

- (128) イブン・ターウィートの校訂版、およびその底本となったアヤソフィヤ写本のい

ずれも、「アブー・ターシュフィーン」としているが、「ウマル」が欠落していると考えるべきであろう。一方、ブーラーク版では、クンヤに言及せず「ターシュフィーン」とのみ記している (*al-ibar*, vol. 7, p. 396)。

- (129) アブー・ハサンは、毎年、支配地の代官を集めて徴税の状況などを確認する機会をもっていた。七四九／一三四八年には、代官だけでなく、解放された王子アブー・ウマルや、和平が成立したカステイリヤ王国の使節、サハラ以南のマリ王国からの使節なども加わりコンスタンティニスに集結していたところ、ここに記されているような事件が生じた (*al-ibar*, vol. 6, pp. 361-362)。

- (130) キリスト教徒(ルーム) 奴隷の出身で、名はシャムス・ドゥハー Shams al-Duhā' とろう (*Ibn al-Ahmar, Rawḍat al-nisrīn*, p. 37)。

- (131) Abū Sa'īd 'Uthmān ibn 'Abd al-Rahmān ibn Yahyā ibn Yaghmurāsān ibn Zayyān. ザイヤーン朝第六代君主アブー・サイード・ウスマーン二世(在位一三四八／一三五二年)。父アブドゥッラフマーンはザイヤーン朝の傍系でアンダルスに追放されていた。父の死後、アブー・サイードとその兄弟はトレムセンに戻った。マリーン朝君主アブー・ハサンがトレムセンを征服するとこれに服属し、イフリーキヤ遠征に従った。しかし、アブー・ハサンがカイラワーンの戦いでアラブ遊牧民に敗北すると、ここに記されているようにアブドゥルワード族の将兵から推戴されてイフリーキヤを去り、一三四八年、トレムセンに入城した。即位後は兄弟のアブー・サービトと事実上の共同統治を行った。一三五二年、マリーン朝君主アブー・イナーンの侵攻により殺され、ザイヤーン朝のトレムセン統治は再び途絶えた (Yahyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-rnwād*, pp. 234-247; *al-ibar*, vol. 7, pp. 115-121)。

- (132) cf. *al-ibar*, vol. 7, pp. 115-117. 一三三七年にマリーン朝によってトレムセンが征服されると、アブドゥルワード族はマリーン朝君主アブー・ハサンに服属した。しかし、カイラワーンの戦い(一三四八年)の際には、アブー・ハサンの軍勢から離脱しアラブ遊牧民の側についた。一方、当初はアブー・ハサンのチュニス支配に協力していたハフス朝の元ハージブ、イブン・ターフラーギーンもこの戦いの時にアブー・ハサンから離反し、マリーン朝軍が駐屯するチュニスの城塞を包囲した。アブー・サイードへの忠誠の誓いは、こうした情勢下のチュニスでおこなわれた。

- (133) Abū Sa'īd 'Uthmān ibn Yahyā ibn Muhammad ibn Jarrah (一三四八年没)。アブドゥルワード族中のジャッラル家(ジャッラル)に属する人物。同家はヤグムラーサンの五代ほど前にザイヤーン家と分かれたとされる。ここで述べられているアブー・サイード・イブン・ジャッラルは、ザイヤーン家に捕らわれていたが逃亡し、その後マリーン朝と協力関係にあった。アブー・ハサンのイフリーキヤ征服に参加した

後、トレムセンに戻っていた。その時にトレムセンの代官をつとめていたのが、王子アブー・イナーンである (Yahyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-rnwād*, pp. 236-237; *al-ibar*, vol. 7, pp. 114-115)。

- (134) Abū Thabit al-Zā'im ibn 'Abd al-Rahmān (一三五二年没)。ここにありのように兄弟アブー・サイードによるトレムセン奪取に協力し、以後アブー・サイード治世においては、軍事の実権を握り、事実上の共同統治をおこなった。マリーン朝君主アブー・イナーンのトレムセン征服に際して一旦は逃亡するが、ビジャーヤで捕らえられ殺された (Yahyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-rnwād*, pp. 234-247; *al-ibar*, vol. 7, pp. 115-121)。

- (135) Sugayr ibn 'Āmir. 不詳。ほぼ同じ頃、アラブ遊牧民のズグバ族の一派アーミル族の指導者として Sughayr ibn 'Āmir ibn Ibrāhīm がおり、アーミル族はカイラワーンの戦い後にザイヤーン朝に服属しているので、この人物の可能性はある。ただし、彼はちょうどこの頃、アブー・サービトから嫌疑をかけられて、一時的に捕らえられていたこともあるので、疑問は残る (*al-ibar*, vol. 6, pp. 52-53; vol. 7, p. 118)。

- (136) al-Hamra'. 現スペイン、グラナダ市街地の南東にそびえる丘陵上に建設されたナスル朝の宮殿都市。アラビア語で赤い城塞(カルア・ハムラー)と呼ばれるのは、周辺の土壌が赤いためともいう。「アルハンブラ」はこのアラビア語がスペイン語において転訛した名称。アルハンブラは単なる宮殿ではなく、丘陵全体に様々な施設や住居が広がる一種の都市であった。イブン・マルズークが説教をしたと思われる金曜モスクは、一四世紀初頭にムハンマド三世が建設したものであり、その遺構は、宮殿の南、現在のサンタ・マリーア教会から発見されている (Ibn al-Khatīb, *al-Iltāz*, vol. 1, pp. 546-547; Leopold Torres Balbás, "La mezquita real de la Alhambra y el baño frontero," *al-Andalus* 10, 1945, pp. 196-214; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "Granada"; 「アルハンブラ宮殿」『岩波イスラーム辞典』)。

- (137) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」、四七頁、註三八を参照。

- (138) al-Mahdiyya. 現チュニジア中部の地中海沿岸の都市。一〇世紀初めにファアティマ朝初代カリフ・マフディーが自らの名を冠した首都として建設した (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, "al-Mahdiyya")。当時、ハフス朝の実権を握っていたハージブのイブン・ターフラーギーンは、マリーン朝軍の侵攻に際して、チュニスカから脱出しマフディーヤに難を避けていた (*al-ibar*, vol. 6, pp. 371-372; vol. 7, p. 297)。

- (139) jandar (複数形 janādīra). マリーン朝においては、宮廷を警護すると共に、支配者の命令を実行し、罰を科したり、逮捕者を牢獄に監禁したりする者たち。その長をミズワールという。この語は二つのペルシア語単語からできており、武器を意

味する *ḡān* と、持っていることを意味する *dar* から構成される〔歴史序説〕第二巻、一四〇頁、*Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “*Djāndār*”。

(140) *Yahyā ibn Shu'ayb*. 不詳。

(141) *Jibāl Tassāla*. トレムセンの北方の町アイン・テムシエントの東側の山岳地域。

(142) マリーーン朝君主アブー・ユースフ・ヤアクープの早世した太子アブー・マリークの子孫マンスール・イブン・スライマーン *Mansūr ibn Sulaymān ibn Mansūr ibn Abī Ma'ik*, ‘*Abd al-Wahid ibn Abī Yusuf Ya'qub ibn 'Abd al-Haq*’ (一三五九年没) のこと。アブー・イナーン死後にもその後継者と目されたことがあった。ワズィールのハサン・イブン・ウマルの専横に対する不満を集めて反乱を起こし、新フェズを包囲した。しかし、同じ頃に挙兵したアブー・サリムが新たなスルターンとなると、捕らえられて殺害された。イブン・ハルドゥーンは当初、彼の陣営にいたが、イブン・マルズークに誘われてアブー・サリム側に協力するようになった (*al-Ta'rif*, pp. 68-69; *al-Ibar*, vol. 7, pp. 302-306)。

(143) *Abū Yahyā Abū Bakr al-Sa'īd ibn Abī 'Inān Farīs*. マリーーン朝君主サイード一世(在位一三五八―一三五九年)。父アブー・イナーンが病床に伏せる間、ワズィールの間で勢力争いが生じ、その結果、王位継承者として認められていたアブー・ザイヤーンに代わってサイードが擁立された。その治世は、ワズィールのハサン・イブン・ウマルが実権を握り、最後はアブー・サリムの政権獲得とともに廃位された (*al-Ibar*, vol. 7, pp. 299-305)。

(144) *al-Ḥasan ibn 'Umar al-Fūdhār* (一三六〇年没)。マリーーン朝下で数多くのワズィールを出したフドゥード家の出身。フドゥード家は、マリーーン族の一支族ワルタージャン家に連なるとされる。ハサン・イブン・ウマルはアブー・イナーンのワズィールであったが、アブー・イナーンが重病に陥ると、王位継承者アブー・ザイヤーン・ムハンマド一世が権力を握ることを恐れて謀殺し、その弟でまだ幼いサイード一世を擁立し、傀儡とした。さらに病からの回復の兆しが見えたアブー・イナーンをも暗殺して権力を掌握した(一三五八年)。その後、アブー・イナーンの兄弟アブー・サリムが台頭すると彼に恭順し、サイード一世を廃位した(一三五九年)。マラケシュの太守に任じられるが身の危険を感じて反乱を起こし、敗れてフェズへと連行され殺害された(一三六〇年)。彼の登場以後、多くのマリーーン朝君主がワズィールによって擁立されたり廃位されたりするようになり、マリーーン朝は政治的混乱の時代に入った。イブン・ハルドゥーンは、アブー・イナーン治世末期に投獄されていたが、権力を掌握したハサン・イブン・ウマルによって出獄するようになった (*al-Ta'rif*, pp. 68-70; *al-Ibar*, vol. 7, pp. 299-305, 309-310; Miguel Ángel Manzano Rodríguez, “El Magreb bajo el poder de los visires: los Banū Fūdūd,” *al-Qanāra* 16, 1995, pp. 403-419; *al-Zirikī*, *al-A'lam*, vol. 2, p. 208)。

(145) ナスル朝第八代君主ムハンマド五世 *Abū 'Abd Allāh Muhammad ibn Yusuf* (在位一三五四―一三五九、一三六二―一三九一年)。父の後を継いで即位した後、一度は政変により王位を奪われるが、一三六二年に復位した。その後は、カスティーリヤ王国とマリーーン朝という南北の二大国が内乱に見舞われるのに乗じて勢力を強め、ナスル朝に最盛期をもたらした。イブン・ハルドゥーンは、二度にわたってこのグラナダの君主に仕えた (*al-Ta'rif*, pp. 80-93, 226-227; *Ibn al-Khaṭīb, al-Iḥāṭa*, vol. 2, pp. 13ff; Harvey, *Islamic Spain 1250-1500*, pp. 206-219; 関哲行・立石博高・中塚次郎編『世界歴史大系 スペイン史一 古代―近世』、山川出版社、二〇〇八年、二二二―二四頁)。

(146) *Abū al-Nu'aym Ridwān ibn 'Abd Allāh al-Nasrī* (一三五九年没)。キリスト教徒の家系に生まれ、幼い時に戦争捕虜となってナスル朝に仕えた。ナスル朝君主イスマーイル一世に気に入られ、息子の養育を任せられることをきっかけとして、宮廷で勢力を強め、次代のムハンマド四世およびユースフ一世、そしてユースフ一世の子ムハンマド五世のワズィールをつとめた。政変によりムハンマド五世が廃位された一三五九年、殺された (*Ibn al-Khaṭīb, al-Iḥāṭa*, vol. 1, pp. 506-513)。

(147) *dar al-harb*. 「戦争の家」が原義でイスラーム法が適用されずにイスラーム世界と戦争状態にある領域。世界はイスラーム法が適用される領域であるか否かによって、ダール・アル・イスラーム(イスラームの家)とダール・アル・ハルブとに区別されていた(「ダール・アル・ハルブ」『岩波イスラーム辞典』)。

(148) *Bitub*. カスティーリヤ王ベドロ一世(在位一三五〇―一三六九年)。父アルフォンソ一世の後を継いで即位し、黒死病の流行にともなう危機を克服するため王権強化など様々な改革を試みた。しかし、庶兄エンリケ・デ・トラスタマラとの内戦に苦しみ、最後は敗死した。政敵からは残酷王と、味方からは正義王と呼ばれた。アラブ趣味で知られ、セビーリヤに現存する宮殿アルカサルを建造した際には、グラナダから呼び寄せた職人を用いてアルハンブラと同様の様式に仕立て上げた。イブン・ハルドゥーンはナスル朝に仕えていた時に外交使節として彼のもとを訪れたことがある (*al-Ta'rif*, pp. 84-85; 関哲行・立石博高・中塚次郎編『世界歴史大系 スペイン史一 古代―近世』、一七〇―一七三頁)。

(149) *Ghumāra*. 現モロッコ北部、地中海沿岸のリーフ山地一帯に住むベル部族。イブン・ハルドゥーンによれば、険しい山に守られているために、しばしば亡命者を受け入れてきたという (*al-Ibar*, vol. 6, pp. 210-223; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, “*Ghumāra*”。

(150) *Jabal al-Saḥāra*. 現モロッコ北部のリーフ山地にある山と思われるが、不詳。

(151) *Banū Muṭṭah*. 不詳。

(152) *Banū Muṭṭir*. 不詳。

- (153) cf. *al-Ibar*, vol. 7, pp. 304-306.
- (154) *Abū Zayyān Muhammad ibn Abī 'Abd al-Rahmān Ya'qūb ibn Abī al-Ḥasan 'Alī*, *ムリー*ン朝君主アブー・ザイヤーン・ムハンマド二世（在位一二六一―一二六六年）。セビーリヤのカステイリヤ王ベドロ一世のもとに亡命していたが、マリーン朝の王位をねらいセウタに上陸した。当時、ワズィールのウマル・イブン・アブドゥッラーは、精神に異常を来していたスルターン・アブー・ウマルの代わりを探していたため、その目にとまり、フェズに入城して即位した。即位後も実権は引き続きワズィールが握り続けたため、これを排除しようとしたが逆に殺害された (*al-Ibar*, vol. 7, pp. 318-323)。なお、校訂版およびその底本となったアヤソフィア写本ともに彼の系譜を「イブン・アブドゥッラフマーン」としているが、「イブン・アビー・アブドゥッラフマーン」の誤りである。ブーラーク版は正しく記している (*al-Ibar*, vol. 7, p. 398)。
- (155) *Jamī' al-Muwahhidin*, 城塞のモスク (*Jamī' al-Qasba*) ともいう。チュニス市街地の北に位置する支配者の城塞の中にある。ハフス朝初代君主アブー・ザカリヤが一二三〇年代に建設した (*Saad Ghrah, Ibn 'Arafa et le mātisme en Ifriqiya au VIIIe-XIe siècles*, Tunis: Université de Tunis I, pp. 211-212)。
- (156) *Abū al-Baqā' Khālid ibn Abī Ishāq Ibrāhīm*, ハフス朝第一六代君主アブー・バカー・ハリド二世（在位一二六九―一二七〇年）。父の後を継いで王位に即ぐが、コンスタンティヌスに拠点をおいて父と対抗してきた従兄弟アブー・アッバースに王位を奪われ殺された (*al-Ibar*, vol. 6, pp. 381-383)。
- (157) *Abū al-'Abbās Ahmad ibn Abī 'Abd Allāh Muhammad ibn Abī Yahyā Abī Bakr*, ハフス朝第一七代君主アブー・アッバース・アフマド二世（在位一二七〇―一二九四年）。ハフス朝の分裂を取めるとともに、アラブ遊牧民の抑制にも成功したハフス朝の中興の祖。彼の父親はハフス朝君主アブー・ヤフヤー二世からコンスタンティヌス太守に任じられ、以後、この地を世襲的に支配していた。一二五六年、兄アブー・ザイドからコンスタンティヌスの支配者の地位を奪うが、翌年マリーン朝君主アブー・イナーンの侵攻によって捕らえられセウタに連行された。アブー・サリムによるマリーン朝王権の奪取に協力したため、一二六〇年にコンスタンティヌスの支配権を返された。その後、ビジャヤーを併合し、一二七〇年にはチュニスも占領して、ハフス朝の統一を成し遂げた。イブン・ハルドゥーンは、ビジャヤー政権のハージブをしていた一二六六年にアブー・アッバースに敗れて地位を失ったが、後に彼に仕え一二七八年からエジプトに移る一二八二年までチュニスに住んだ (*al-Ta'rif*, pp. 230ff; *al-Ibar*, vol. 6, pp. 369-371, 375-376, 378-379, 382ff; *Abū-Nasr, A History of the Maghrib*, pp. 129-130)。
- (158) *Abū 'Abd Allāh Muhammad ibn Abī Zakariyā' Yahyā ibn Abī Yahyā Abī Bakr* (一二六六年没)。ビジャヤーを支配したハフス朝の王族。従兄弟アブー・アッバースと同様、父親の代からこの地を世襲的に支配していた家系の出身。一二六六年に父の後を継いでビジャヤーの支配権を握るが、一二四七年にはマリーン朝君主アブー・ハサンに、一二五二年にはその子アブー・イナーンにと、二度にわたってマリーン朝に征服された。アブー・イナーン死後、従兄弟アブー・アッバースとともに旧領の回復を約束されてイフリーキヤに向かった。しかし、すぐにコンスタンティヌスを返還された従兄弟と異なり、ビジャヤーは当時チュニスのアブー・イスハーク二世に占領されており、その回復には四年を要した。一二六四年にビジャヤーを手にした後は、アブー・アッバースとの抗争に明け暮れ、翌々年、敗死した。イブン・ハルドゥーンは、ビジャヤーから追われてフェズのアブー・イナーンの宮廷に出入りしていた頃のアブー・アブドゥッラーと意気投合したため、そのビジャヤー回復の陰謀に連座して投獄されたことがある。アブー・アブドゥッラーがビジャヤーを取り戻した際には、招かれてハージブに任じられるが、彼の敗死によりイブン・ハルドゥーンもその地位を失った (*al-Ta'rif*, pp. 66-67, 94-99; *al-Ibar*, vol. 6, pp. 353-354, 356-357, 362-363, 366-368, 375-379)。
- (159) *al-Ashraf, Abū al-Muḥḥir Shāhān ibn Husayn ibn Muhammad ibn Qalāwān*, バフリー・マムルーク朝第二六代君主シャアバーン二世（在位一二六三―一二七七年）。一三五三年生まれ。政治的に混乱し、スルターンが短期間のうちに廃位、殺害されることの多かった一四世紀後半のバフリー・マムルーク朝では珍しく、一四年間の長期の間スルターン位に留まった。一二六三年に従兄弟のスルターン・マンスール・ムハンマド・イブン・ハーッジが、アターベクのヤルブガー・ハーッサーキーによって廃位された後にスルターンに擁立された。その後、ヤルブガーの排除に成功するとスルターンの権威回復に努めたが、一二七七年にメッカ巡礼の最中に首都カイロでアミールらによってクーデターを起こされた。シャアバーンの子アリーがスルターンに擁立され（スルターン・マンスール・アリー）、シャアバーンはカイロに帰還した後に捕らえられ殺害された。 (*Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, al-Durr al-Kamīn*, vol. 2, p. 288; *Ibn Taghribirdī, al-Minhāl al-sāfī wa al-mustawfā ba'ā al-wāfī*, 13 vols, ed. M. M. Amīn, Cairo, 1984-2009, vol. 6, pp. 231-248)。
- (160) *isādār*, 通常は *al-usādār* あるいは *al-usādāh* *dār* と綴る。ペルシア語を語源とし、掌握することを意味する *isāz* と、持っていることを意味する *dār* からなる。マムルーク朝時代のエジプト、シリアでは軍人支配層であるアミールのなから任命され、スルターンの財産の管理、軍人に対する俸給や糧秣を支給する責任者。歴史序説の中でも説明されている（『歴史序説』第二巻、一五〇―一五一頁）。
- (161) *Nāṣir al-Dīn Muhammad ibn Aqbughā Ās* (一二九三年没)。スルターン・シャアバー

ン二世時代の四十人長のアミールの一人。マムルーク朝後期の歴史家マクリー
ズィーの年代記によれば、彼のスルターンのウスターダールへの就任は七十五年
ジュマードー第二月二二日／一三七三年二月九日のことであり、イブン・マル
ズークがカイロに到着した時期はこれより後のことと考えられる (al-Maqrīḥī, *al-
Sulūk li-ma'arifa dawwal al-mulūk*, 4 vols., ed. M. M. Ziyāda & Sa'īd 'Abd al-Fattāḥ, Cai-
ro, 1936-1973, vol. 3, p. 221; Ibn Taghārī, *al-Manhal al-sāfī wa al-mustawfā ba'da al-
waḥf*, vol. 9, p. 327)。

(162) イブン・マルズークはカイロにおいてハーンカー・シャイフーニーヤ、マドラ
サ・サルグタムシイーヤ、マドラサ・カムヒーヤでマリーク派の法学やハディ
スを教授していたことが知られている (al-Maqrīḥī, *al-Sulūk*, vol. 3, pp. 357, 376)。